

革命権力

- 工場占拠・人民の軍隊・革命戦争
- 岩田派の破産をのりこえ、
前衛・労革委に結集せよ！
- 結成宣言—前衛・労革委三多摩地区委／関西地区委
- 連合赤軍の闘争と行動をめぐる諸問題
- 拠点根拠地闘争の前進のために
- 岩田派の破産と中間派の再屈服……小山理
- レーニンとロシア革命の軍事問題……水沢史郎

1972・5

第2号

前衛・労働者革命委員会

革命権力

第2号

1972・5

前衛・労働者革命委員会

工場占拠・人民の軍隊・革命戦争

非合法党の建設・それに基づく対権力

闘争と拠点根拠地闘争の組織に向けて

前衛・労革委 — 2

岩田路線の総破産とその陰蔽工作・中間派の再屈服

をのりこえて、前衛・労革委に結集し前進せよ！

前衛・労革委 — 5

結成宣言

前衛・労革委 三多摩地区委員会 — 11

前衛・労革委 関西地区委員会 — 13

連合赤軍の闘争と行動をめぐる諸問題 — 15

拠点根拠地闘争の前進のために — 27

(一) 拠点根拠地闘争の全般的総括 — 27

(二) 大阪中野における闘いの総括と現状 — 37

(三) ソビエト運動の前進のために — 玉川浩一郎 — 39

(四) 三多摩S製所における闘い — 45

岩田派の破産と中間派の再屈服 — 小山 理 — 57

レーニンとロシア革命の軍事問題 — 水沢史郎 — 66

工場占拠・人民の軍隊・革命戦争!!

非合法党の建設、それに基づく対権力
闘争と拠点根拠地闘争の組織に向けて

前衛・労働者革命委員会

(一)

固として実現していくであろう。

(二)

-2-

全国の同志諸君！

七〇年初頭以来の岩田派―岩田路線に対する前衛派党内闘争を通して結集してきた我々は、昨年八月、前衛派内のフラクション―全国フラクションを基礎として、前衛・労働者革命委員会を結成した。

以降、われわれは、たとえ一歩一歩であるにせよ、新たな確信の下にわれわれの活動分野をおし広げ、今やいくつかの地区党の建設を組織的集約点としうる段階に入った。

われわれは、その組織的課題を、「工場占拠・人民の軍隊・革命戦争」のもとに、「非合法党の建設・それに基づく対権力闘争と拠点根拠地闘争の組織」として、断

この日本階級闘争の現段階の特徴は、一九五六年以来一七年間の日本階級闘争の闘争組織―闘争形態の発展と蓄積の中から、権力闘争とその組織問題を生み出したこと、その打開をめぐる陣痛の過渡期にある、ということである。

全国の革命的労働者学生諸君！

この陣痛の過渡期は、対権力闘争か、ソビエト運動か、という六八年以降の共産主義左翼戦線の二者択一の問題設定の枠そのものの止場を通してこそ、初めて打開されるであろう。

何故なら、六七年以来この数年間の日本階級闘争の巨大な展開と、ブンド七回大会の分裂・岩田路線の発生とそれへの闘争からのわれわれの辛苦の政治的教訓というものは、①党組織の内部に軍事組織が組織されねばならぬこと、②それは、人民の軍隊の中核とならねばならぬこと、③そして、その下に職場・工場・学園の拠点運動は、人民の軍隊・革命戦争の根拠地を闘いとる闘い（根拠地闘争）として位置づけ組織されねばならない、ということだからである。

(三)

このことは、形を変えているとはいえ、連合赤軍の闘争と行動をめぐる問題の中にも凝縮されている。

第一に、公然たる革命戦争―日本の現段階においては武装遊撃戦は、公然たる革命戦争の性格をもつ―は、公然たる根拠地を基礎とする革命戦争である。それは、古典的概念で言いかえれば、二重権力状態のことであるが、

日本においては、それは、工場・学園を根拠地とする革命戦争として準備されねばならない。

第二に、現在の日本における階級関係の中にあつては、武装遊撃戦―武装蜂起―公然たる革命戦争の性格をもつ闘争は、武装遊撃組織が、質・量ともに萌芽段階であること、その根拠地をめぐる主体的条件も、いまだ成熟してはいないということによって、その勝利の条件は存在していない。

第三に、従つて、現段階の日本階級闘争の軍事問題は、非公然闘争の軍事問題―非公然軍事組織、その武装の質―である。

それゆえ、われわれ権力闘争の共産主義組織の任務は、非公然軍事組織の建設と強化及びその戦線の形成拡大であり、それによって、一九五六年以来一七年間に及ぶ公然―半公然の権力闘争の戦線を再編・発展させることである。またそのもとにおいて、よりやくにして多極化を開始しはじめた労働戦線における闘い―工場・職場闘争と、六七―六九年の対権力闘争の公然たる根拠地をなし、現在においてはその再建が問われている学園闘争とを拠点根拠地闘争として組織し構築していくことをなければならぬ。

だからこそわれわれは、「工場占拠・人民の軍隊・革

命戦争」を日本革命の戦略問題としてより一層鮮明に掲げるとともに、非合法党の建設、それに基づく対権力闘争と拠点根拠地闘争の組織を、われわれの任務とせねばならないのである。

四

ところで、岩田路線こそ、こうした対権力闘争の課題を、非合法党・非公然軍事組織によって追求することを権力闘争Ⅱソビエト運動の一面的図式のもとに放棄し、党の任務を内部階級闘争Ⅱ対中核派「せんめつ戦」にねじ曲げ、従って武装の問題を、国家権力に対する軍事組織の建設の問題から、内ゲバと個別行動委員会の武装にのみ限定してすませるといふ「権力闘争からの召還路線」に他ならなかった。

従って、こうした岩田路線Ⅰ政治的には、新左翼主要打撃路線、組織的には、ブンドマル戦派の継承性の切りすてーが総破綻するのは、その本質からいって必然であった。

だが、われわれが問題とせねばならないのは、こうした岩田路線の総破綻にも拘らず、彼等は、その路線上の

根本破綻と組織原則上のデタラメさを、自己批判の言辭の乱発によって、陰蔽するのに狂奔してきたこと（「世界革命」三号山川（川上）論文）であり、ブンド（マル戦）結成以降われわれと共に一貫して組織活動を担ってきた諸君（中間派）が、前衛四〇号岩田路線への屈服（七〇・七）に続いて、再びそれに屈服しているだけではない、破産した岩田路線の個別革命論への手直しの枠内に安住しているということである。

こうした状態に対し、前衛党内闘争Ⅱ岩田路線の根本的止揚を基準に再出発したわれわれは、岩田路線の政治的止揚のみならず、その組織的止揚Ⅰブンド（マル戦）の組織的継承性の明確化を基礎とする党建設Ⅰを自らの課題として、前進するであらう。

それこそが、ブンド（マル戦派）Ⅰ前衛派で闘ってきた者に問われている道である。

全国の同志諸君！ とりわけ、前衛四〇号岩田論文と岩田路線への対決を自らの課題としてきた同志諸君に、われわれは、岩田路線の総破綻と中間派の再度の屈服をのりこえて、前衛・労働者革命委員会に結集し、われわれと共に新たな組織的前進を実現することを呼びかける！

全国の戦闘的労働者・学生諸君！

工場占拠・人民の軍隊・革命戦争の日本革命の戦略問題を鮮明にさせ、「非合法党の建設、それに基づく対権

力闘争の組織」による日本階級闘争の公然たる革命戦争Ⅱ武装蜂起の勝利を目指し、われわれと共に前進せよ！
一九七二年五月

岩田路線の破産とその陰蔽工作 中間派の再屈服をのりこえて 前衛・労革委に結集し前進せよ！！

前衛・労働者革命委員会

七〇年初頭以来、前衛派において岩田路線Ⅰ岩田派と闘ってきたもの、それとの対決Ⅰ止揚を自らの課題としてきたものは、今こそ新たな組織的前進を自らのものとせねばならない。

そのためには、第一に、岩田派の破産とは何か、第二に、「世界革命」三号（山川Ⅱ川上）による陰蔽救済工作、第三に、個別闘争総括の視点はもちつつも、再びそれに屈服している中間派の問題、そして第四に、前衛派党内闘争の根本問題とその止揚の道が改めて確認されねばならない。

一、岩田路線の総破綻

岩田派の破綻とは何か——
それは、単に岩田個人の個人的破産の問題なのではな

それは、岩田路線の総破綻の問題である。

この点がまず第一に、明確にされねばならない。何故なら、岩田派だけではなく、半岩田中間派も、路線その

ものの破綻の隠蔽とその曖昧化に腐心しているからである。

だが、このことは、岩田の組織上の曖昧性―根本的には社会的には教授・評論家、内に対しては組織の指導部という指導部には許されえない二重人格性・個人的理論権威（ブルジョアの権威）の絶対化とそれへの組織問題の従属の問題とそこから発生した前衛派結成以降の組織上の問題の重要性を薄めるといふことではない。

それどころか、岩田のこうした組織上の問題―岩田だけではなく、川上も同様である―についていえば、それが方針以前の原則問題として許されぬことであり従って、われわれは、無原則的曖昧分子岩田―川上の階級戦線からの放逐の問題としてはっきりさせなくてはならないのである。

では岩田路線の破綻とは何か。

それは、何よりも一九七〇年六月の法大闘争に対し、中核せんめつ戦なるものを対置し、以降それを「党の党としての闘争」（前衛五一号）とした新左翼主要打撃路線の根本的誤謬の顕在化と、その結果としての「中核せんめつ戦」のウヤムヤ化に最もよく代表されている。

（中間派は、われわれのことを「対中核派闘争の階級的意義を欠落した部分」などといっている。では、彼は

二、世界革命三号（山川）による隠蔽救済工作

だが、昨年九月の世界革命三号の山川 論文は、こうした体系的路線の全面破綻に対し、それを路線と党建設問題の総括として真向うから行うのではなく、それとは全く逆に、その回避と棚上げとビホウ工作にいかにか腐心してきたのかを示すものに他ならない。

そのつぎはぎ工作の産物の文書は、岩田―川上の常套手段である 「自己批判」の言辭の乱発による体系的路線の全面破綻の事実の必死の隠蔽工作であり、「山内除名」の「正当性」の一点の堅持のための策動であり、岩田の個人権威の救済の涙ぐましい工作を内容としていた。

だが、「組織問題」とか「組織の主体性」という言辭を「自己批判」の言辭と同様にならべたてているこの文書のマンガ的性格は、現実の組織活動や実践活動に関係がなく、岩田と同様に組織問題のけじめが問われるべき当の川上によって書かれていたことである！

だが、われわれが問題としなければならぬのは、中間派が、前年の前衛四〇号岩田論文と岩田路線への屈服にひき続いて再度屈服しているということであり、また、岩田路線の部分的に個別闘争の手直しによって、その枠

新左翼主要打撃路線は破産せず、まだそれを正しいと考えているのだらうか）

すでに、われわれが革命権力第一号で明らかにしたように、七〇年初頭より体系的路線として出てきた岩田路線は、

①個別反乱の教条化、②それに基づく「反乱」の 대중への強制、③「組合（自治会）か、行動委か」という単純二者択一と、組合・自治会の単純切りすて等々をその内容としていたが、それらの軸をなしていたものこそ、七〇年六月以降の法大闘争をめぐる論争で暴露された新左翼主要打撃路線―国家権力との対決から召還し、権力闘争をソビエト運動―党派闘争に切り縮め一面化する―と、それと表裏一体をなした前衛四〇号の党建設路線―ブンドマル戦線の組織的継承性の切りすて、新左翼的体質なるものの排斥による党建設であった。

すなわち、岩田路線の破産とは、単に、学園闘争や労働戦線における当面の方針上の破産―中間派が限定している個別闘争次元での破産―にとどまるものではない。それは、党の党としての闘い―党独自の闘いを新左翼主要打撃路線に設定し、それと表裏一体の関係で、党建設路線なるものを設定した「体系的路線」の全面的破産以外の何物でもない。

内に安住しているということである。

☆その他二、三の個人的グループ的傾向

ここで、中間派以外のいくつかの個人的グループ的傾向の存在についてふれておくことにする――

三・多摩のS。川上と共に問題を曖昧にさせる役割を演じている。それは、その組織的立場が、岩田―川上と共通性をもっているからである。

神奈川Sグループ。前衛四〇号及び岩田路線に対する党内闘争において、途中でそれを放棄し裏切った。それだけではなく、岩田派への闘争の貫徹を志していた多くの神奈川内の同志たちを、理由にもならない理由で除名するといふ岩田のお先棒をかついでその新左翼主要打撃路線に忠勤を励んだ。彼等が、岩田路線―岩田派にこのように慮着し吸収されていたのは、理由のないことではない。

七〇・三月の彼等の青共同の共突隊への改組論は、国家権力に対する軍事組織の問題を欠落させた党派闘争のための暴力組織への改組であり、そこには、岩田の新左翼主要打撃論的傾向が内包されていたのである。ここから、七〇・七月拡大中央委において、川上を通して妥協の手が差しべられるや、それにとびついて、岩田派に

対する闘争を放棄し、対中核せんめつ戦→新左翼主要打撃路線の内部に吸収され転落していったのである。

共武行内部のB。岩田路線の先兵でありながら、その路線上の破綻が明々白々となるや、今度はその批判にまわって破綻の責任回避にきゅうきゅうとしていた。

彼の「権力による権力の打倒」という概念は、権力の中心を軍事組織においていないということだけではなく、「まずソビエト権力をつくり、それから国家権力を倒す」という構造になっていて、国家権力に対する党の関係という第一の原則的問題が曖昧化され、ネジ曲げられる理論的基礎をなしてきた。

世界革命三号のツギハギ性とは、これらの（勿論岩田派を含む）雑多な諸傾向のよせ集めの結果にすぎない。

三、中間派の再屈服と個別革命論への手直し

中間派の「世界革命」三号山川論文への屈服とは、中間派自身が、岩田派の一部であった共武行内部のBグループと同様の態度→岩田路線の破綻の総括と責任を回避

的次元に限定するということによって、個別闘争の総括それ自体においても重大な限界を持つ結果に陥入っている。

全通大崎総括（山野辺署名文）は、個別反乱教条路線と新左翼主要打撃路線そのものの総括を棚上げしているということによって、大崎闘争委員会の組織総括問題に

無自覚であるばかりか、むしろ、その

抽象文句によって「路線の破綻の結果としての敗北」という事実を陰蔽しているのである。

それに対し、R自販闘争総括（北部地区委署名文）は、その総括が、大崎総括（山野辺）に比してはるかに具体的である、ということによって、逆にその矛盾が鋭く顕在化している。それは、岩田路線を前提としているが、ために「六五年に組合をつくったのがそもそも間違っていた」というような総括の自己否定に陥入る自己矛盾を内包せざるをえないのであり、それゆえに、その自己矛盾を無理矢理になくそうとすることから、総括すべき岩田路線の個別反乱絶対化を、R自販の個別綱領（個別革命論）として再確認するという結果→岩田路線の総破綻の個別革命論（個別工場占拠の戦略化・個別革命の単純総和としての、権力打倒をぬきにした革命論）への手直しを軽信し、あるいはその手直しによる破綻の陰蔽に手

する態度→をとり、その中に安住しているということである。

すなわち「路線はまだない」↓（路線はなかったから破産したものなり）

「前衛四〇号は、岩田の個人論文にすぎない」↓（個人論文であるから自分たちは関係ない）

こうした言辞は、前衛四〇号の岩田の立場→ブンドマル戦派とは関係なかったし、それまでの前衛派の組織指導にも自分は責任がなかったという文字通り無責任な立場→と同じである。

そうした言辞は、

第一、自分自身をそれでごまかすことはできないはずである。

中間派は、岩田路線の破綻の部分的修正派をその性格としていた。

たしかに彼等は、他のいくつかの諸個人やグループとは異り、個別闘争の次元においてではあるとはいえず、総括と検証の問題を具体的課題とした（われわれ以外の）唯一のグループであった。

だが、彼等は、路線それ自体と前衛四〇号を中心とする組織問題をあらかじめ枠外におき、問題の範囲を個別

を貸す結果→に陥入っているのである。

以上のことは、意識的にせよ、無意識的にせよ、世界革命三号山川論文へ再屈服し、その枠内に安住していることの結果であり、より根本的には、前衛四〇号岩田党建設路線と一連の除名策動に、屈服連帯してきたことを棚上げしていることの結果である。

ブンドマル戦派→前衛のわれわれに問われた（今も党建設に際し問われている）根本的問題は、党としての組織的継承性の明確化の問題である。

これは、われわれにとつての党建設上の基本問題である。この問題を、「リーニン党組織論の抽象的せんさく」（世界革命三号）でスリカエることはできない。前衛・編集委員会という名称→党組織の名称をもちえず、新聞の編集委員会という形式でしかありえないという解党性→は、その基礎的問題を欠落させていることの象徴的表現以外の何物でもない。

これは、前衛四〇号の根本総括の問題である。

これと並ぶ根本的問題は、（すでに、革命権 第一号において、明確にしたのであるが）岩田路線の総括止場の問題であり、現段階においては、その破綻の総括の問題である。それは、新左翼主要打撃路線を軸とする体系的路線の破綻の明確化の問題であり、究極的には、工場

占拠・人民の軍隊・革命戦争として、日本革命の戦略問題を明確化するというものでなければならぬ。

また、それは、「非合党の建設、それに基づく対権力闘争と拠点根拠地闘争の組織」の任務とさせねばならぬ問題である。

たな組織的前進を実現せよ！

四、岩田路線の総破綻とその陰蔽工作―中間派の再屈服をのりこえ、前衛・労革委に結集し前進せよ！

昨年八月における前衛・労働者革命委員会の結成は、それまでの岩田派に対する様々な党内闘争を、独自の分派闘争へと再組織することへの再出発であった。

われわれは、その自らの組織的課題を、最後までおしすすめるであらう。

全国の同志諸君！

岩田路線―岩田派との対決を課題とし、闘ってきた全国の同志諸君！

岩田路線の総破綻とその陰蔽工作・中間派の再屈服と個別革命論への手直しをのりこえて前進せよ！

前衛・労革委に結集し、「非合法党の建設・それに基づく対権力闘争と拠点根拠地闘争の組織」のもとに、新

結成宣言

前衛・労働者革命委員会 三多摩地区委員会

全国の同志諸君！ 全ての革命的労働者・学生諸君！われわれは、昨年八月結成された前衛・労働者革命委員会の党的基準―岩田路線（理論）の主体的止揚―のもと、三多摩地区において活動を開始し、ここに三多摩地区委員会結成を実現したことを明らかにしたい。

三多摩地区の特徴は、第一に立川基地、横田基地をはじめ支配者階級の軍事拠点が数多く存在していることである。だから革命的労働者・学生にとっては、わすれることができない砂川闘争をはじめ、日本階級闘争史上画期的な闘いの舞台となり、今後もなる地区である。

第二に、日本資本主義にとって戦略的産業（特に輸出関連）になっている自動車、電機を中心とした企業が多数存在しているということである。日産、日野、日立、東芝、日本電気等々、大独占を中心にその下請け関連企業もあわせ数十万の労働者が存在している。これらの労働

者は同盟や電機労連の御用幹部と会社の一休となった弾圧のもとに、低賃金と無権利状況のもとにおかれていた。しかし少数派ながら反合闘争、反戦闘争を担う革命的労働者の運動はしだいに社会的な力となり、これらの大独占をゆるがす勢力になりつつある。

第三に、日本階級闘争にとってはほんのサンシのつまみ程度にもならない問題ではあるが、われわれにとって当面きわめて重要な「前衛」派の拠点になっていることである。

前衛三多摩グループは、破綻した岩田路線の手直し修正主義による再結集の一つの中心になっている。その意味で、この三多摩グループとの分派闘争に勝利することは、我々の党建設にとって重大な任務になっている。

以上三点にわたって三多摩地区委員会をとりまく状況について明らかにしてきたが、我々の出発にあたって、前衛三多摩グループとの分派闘争の自己批判的総括を示すなければならない。

すなわち、第一に、前衛派内分派闘争の公然たる論争

の端初になった「前衛」四〇号岩田論文をはじめ、七〇年法大闘争総括、山内氏除名問題など党建設にかかわる重大な問題に関し、当時前衛三多摩地区においてきわめて不十分なかたちでしか論争をおこなわず、あいまいなまま收拾させることを許してしまつたことである。第二に、当時岩田路線とは関係なく、組合的戦術と行動委員会運動の結合によってNの闘いが三多摩で展開されていたが、岩田路線のモデルにわい曲され、岩田路線の破綻の陰蔽の手段に利用されるのを許してしまつたことである。その結果第三に、Nの部隊を前衛派から我々のものに獲得することができなかつたことである。

しかし、この後、拠点闘争の総括を手がかりに、自己自身の内部の「岩田」との対決を本格的に開始していった。この困難な闘いの成果は、いうまでもなく「革命権力」の発行にほかならない。我々はこの「革命権力」一号の内容「工場占拠・人民の軍隊・革命戦争」の内容をもつて本格的な分派闘争を開始した。

前衛中央は、新たに三多摩に学生部隊を移駐させ、自動車戦線なるものを作っている。彼らはまたまた岩田路線の破綻した反乱教条主義をよくあらわしている「日産反乱に総結集せよ」とか「組合を左から解体せよ」とか「組合主義春闘を粉碎せよ」等々の方針にもならない方

針にもとづいて、「反乱の陣型の配置」はととのつたとかいつている。しかし、彼等の方針によっては「日産反乱」はおろか、永遠に職場のなかに公然と登場することはできないであろう。

我々は、きわめて少数ではあるが、三多摩地区の革命的労働者・学生の接点を持っており、またその人々を通じての大衆運動に対する影響力を持っている。我々は、これらの活動家との交流をますます深め、我々の信頼をかちとり、党建設の事業に共に努力するような関係をつくる決意である。

いうまでもなく、我々が目指す地区党は、拠点根拠地を切り拓く闘いを主軸にしながら、同時に権力に対し、完全に非公然を要求される軍事を組織できるものでなければならぬ。

その意味からいって、我々の事業は非常な困難が予想される。しかし、この困難な闘いも、我々は四つの作風にもとづいてやりぬくなら、かならず達成できると確信している。

三多摩の革命的労働者・学生諸君！

前衛・労働者革命委員会三多摩地区委員会のもとに結集せよ！

前衛・労働者革命委員会

関西地方委員会・結成準備会

我々は、前衛四〇号紙上に掲載された福原論文の所謂「二重の敗北の総括」に基づく前衛派路線を認めない。

前衛派は原則綱領という立派な理論をもつて、自分達だけが唯一の前衛党と自惚れ、「急進的反政府街頭左翼集団」新左翼を粉碎することが前衛党の質を獲得する条件である」とりそぶっている。

こうして新左翼主要打撃論なる路線をもつて、内ゲバ党に転落していった。

それに対して、我々はこの前衛岩田派路線を批判した鳥井・山内両氏の主張を全面的に支持すると同時に、自らが旧マル戦派を継承する党派である事実によって、自己の主體的総括によって、前衛・労働者革命委員会として独自に革命党建設の準備を開始することを宣言する。

一九七二年四月

革命権力 第3号 (内容予定)

☆岩田『組織路線』の根本的打破と我々の党建設

◎前衛40号岩田『組織路線』を打破して、
党建設を闘いとれ!

◎ブンド(マル戦~6,7回大会)一前衛派党内
闘争と我々の立場

◎ブンド7回大会の組織総括

一7回大会をめぐるブンド・マル戦派系諸分
派の総括について一

☆資料

☆米一中一ソ・三極体制とベトナム革命戦争/他

革命権力 第1号 (1971・10)

☆岩田路線の根本問題と我々の道/☆世界革命闘
争の提起している核心問題と先進国一日本革命の
戦略問題/☆中国共産党の対外政策をどのように
受けとめ、いかに評価するのか/☆我々の党建設
の主体的意義

***** 残部若干有り *****

連合赤軍の闘争と行動をめぐる諸問題

一、問題の所在

二月下旬の南軽井沢浅間山荘における連合赤軍の武装闘争以来、特に、いわゆる「リンチ大量殺人」事件の出現を契機にして、現在(三月中旬)の日本階級闘争にはかつてなかった問題が登場している。

第一に、国家権力が、この問題を意識的計画的に用いた、権力闘争の戦線に対する新たな性格の攻勢に出ていることである。

第二に、連合赤軍の闘争と行動をどう把握するのか、という主体的問題である。

この二つの問題は、切りはなすことはできない。

何故なら、連合赤軍の闘争と行動を内在的に把握しようとするものは、第一の、国家権力の権力闘争戦線全体に対する攻勢の問題についていいかげんに扱い、それに対して明確く、同然となっていないからである。

我々は、それを日本階級闘争の主体的問題として内在的に把握、内在的止揚をこそ自己の課題とせねばならぬ。

連合赤軍の闘争と行動は、日本階級闘争の現状においては、武装蜂起をいみする。武装銃撃闘争をめぐるものであった。それゆえに、第一に、その闘争(浅間山荘)の中には、国家権力と権力闘争の対決関係が最も鋭く凝縮されている。第二に、その関係は、日本の共産主義左翼諸組織と諸戦線が好むと好まざるとに拘らず、それら全体を規定する要因となっている。第三に(これが、主体的には、最も重要であるが)

その闘争は、種々な問題におおわれながら、日本における武装蜂起をいかに準備し、闘いとするのか、という根本問題を、すべての者に、その闘争そのものによって問われているのであり、同時に、構成員の死による組織防衛という重大な誤りによって、革命組織の組織原則と指導部の組織問題を改めて提起している。

二、国家権力の新たな階級攻撃の性格

我々は、まず「大量リンチ殺人事件」をテコとした国家権力の新たな性格の攻勢のバクロから開始する。

これは、権力闘争を担う者の原則的立場である。

現時点ほど、その原則的立場が問われている時はない。今ほど、その原則的を種々な留保条件でボヤカシたがっている者が多い時はないからである。

国家権力は、現在権力闘争の全体——その戦線、基礎、土壌——に対する階級攻勢に全力を挙げており、それは、かつてなかった規模で、ブルジョワマスコミをまきこみ、動員しつつ行なわれている。

彼らの第一の直接の目的は、連合赤軍を打ちのめすことである。

神の心理的切り崩し攻撃に出たこと、これは、六〇年安保以来の日本階級闘争の歴史になかったことである。

我々は、一度、六七年十・八羽田闘争における山崎君虐殺問題に対する「学生が、学生を殺した」という権力の逆キャンペーンを想起するが、それは、当時のブンド一中核両指導部に対するどろい喝の手段であって、質は、決して、同じではない。

また、いわゆるフレイム・アップは、戦後四九一五〇年の「下山—三鷹—松川」の三事件の権力による陰謀の中にみることができ、しかし、それは専らCIAによる計画と実行によるものであって、日本の戦後支配階級の仕事ではなかったし、また、今回の問題は、事件そのものは実在するのであって、いわゆるフレイム・アップではない。

日本の国家権力が、初めてこうした攻撃にのり出した背景は何か——

第一は、支配階級が、武装闘争の拡大をおそれていること。

第二は、彼らの真に恐れたことには、権力闘争の戦線と気運が、七〇年安保闘争の敗北にも拘らず、深化と拡大の傾向にあり、また、そうした傾向は、フランス—西ドイツ—イタリア等先進国階級闘争の新たな共通するも

第二の目的は、マスコミを巧妙に用いた連合赤軍のリンチ殺人事件の「内幕」をあばきたるることによる、権力闘争の担い手とその基礎をなす活動家大衆を革命闘争へのかいぎへとつきおとすことによって、権力闘争——新左翼戦線の拡大をマヒさせ、阻止しようとするためのものである。

その性格は、マスコミ機関の計画的利用と全面的動員による「精神的—心理的攻撃」という新たな性格をもっている。

そのキャンペーンは、権力とマスコミの意志統一によるのか、権力のマスコミ機関の意識的操作によるのか、—— 事実はその両方にまたがって存在している。

新聞のおどろくべき共同歩調、権力からの事実の計画的小出しによる社会的ヒステリー状況の演出、そのなかでの「自首者のいぶり出し」等々は、その結果である。

このことは、彼らが、「日本の警察史上、初めて、現場に記者席を設営した」こと、「彼らがその前日、試し堀りをした上で、大勢の報道陣を招待、サービスにこれつとめながら、改めて本番をやるといふその墓場ショーの演出」のなかに最も鋭く表現されている。(引用は、三月十三日の「毎日」)

権力が、彼らの知力を総結集して、新左翼戦線への精

のとなっている事、

第三は、しかも、武装闘争の現在の規模でさえも、そのゲリラ的展開に対しては、権力自身が、その封殺と制圧に著しい限界を感じていること、

従って第四は、権力は、日本階級闘争の発展に対し、警察力・支配弾圧体制の著しい強化拡充——公安体制の質的量的強化、内戦作戦を考慮に入れた四次防——をおしすすめると共に、それを補足する政治的対応の側面についても、その新たな準備をおしすすめてきたこと、であり、

従って、新たな性格の階級攻撃は、そうした本格的対応の準備を下地として生まれたものである。

日本の数多くの戦闘的活動家が、連合赤軍の闘争と行動をめぐる権力とマスコミの相結託した攻勢を前にして、それを「プチ・ブル急進主義の破産・破滅」「スターリン主義の血の粛清」「野合の結果」だとする諸党派の切りすて的外在的評価に強い抵抗を感じていること、その闘争と行動に深刻な衝撃を感じ、それへの主体的対応を求めて問題意識を緊張させていること、また、まず国家権力の攻勢に対する階級の立場の断固たる表明を第一として、また、まさに、現在の権力攻勢にかつてない反革命性を直感しているからであり、同時に、連合

赤軍の闘争と行動の中に、本質問題の一端をみているからだ。

我々は、新たな権力攻撃の階級性格を鮮明にバクロすることによって、多くの戦闘的労働者学生が感じてくる直感的な対決の立場を具体的に打ち固めていくことを任務の一環とせねばならない。

三、浅間山荘をめぐる権力側の政治的意図

精神—心理攻勢として社会的に表面化し具体化した新たな対応は、すでに、浅間山荘に対する権力側の攻撃と対応の仕方においても開始され、潜在していると考えなければならぬ。

十日間のその対決の中を一貫して流れている、権力の底に秘めた政治的意図、とくに二月二十九日の権力の「攻撃」の中で彼らの行動の基準となつたものは、「統一」に対する単純な「軍事的制圧」の問題ではない。むしろ、それはその攻防戦が、文字通りの局地的な戦争状況の相を呈することを防止するという「事態の非戦争化」「非軍事化」への「政治的意図」と、そのための周到な配慮——人質キャンペーンによる警察の軍事行動への徹底的

に従属させ、集中して対応したのである。

連合赤軍の五人は、最悪の状況にありながら、武装闘争を貫いた。

そのことによって、権力の政治的意図は、半ばは、つき崩された。

だが、事態を、警察的枠内に封じこめて局地戦争の公然化を回避し、五人を権力の体制の中にひきもどすという（「革命の殉教者を出さない」）権力側の究極の政治的目標は、達成されたものとみなければならぬ。

それゆえ、浅間山荘闘争をめぐる権力との基本的結着の関係を、「権力による犯人射殺が行われなかったこと」と「警察側がバタバタ倒れたこと」をもって、「警察作戦の破産」と総括したり（ドトウ）

あるいは、同様に、力で押し切られたことをもって、単純に「敗北」（サラギ一派）とするのは、近視眼的の見方である。

さらには、戦旗荒派のように、「権力が射殺体制を布いたから、権力を殺したのは、正当な自衛手段である」というのは、（そして、こうしたニュースは、ドトウ、サラギ派にも共通しているのだが、）評価にさえなっていない。（註）

（註）①浅間山荘闘争を積極的に評価すること、その

な政治的紛飾、「突撃」時における狙撃行為の徹底的抑制、そのための機動隊長の突撃指揮による下部機動隊員の掌握——であった。

浅間山荘武装闘争は、明らかに、戦後の日本階級闘争の中で、最高度の対権力—武装闘争であった。

一切のとりひきに陥せず、沈黙と銃弾で決死の体制を示したとき、それは、かつてない対決の関係——潜在的な、局地的戦争状況——を作り出すと共に、日本の広範な人民大衆を精神的にひきつけ、それに対する当時のマスコミのキャンペーンを極めて薄っぺらなものとした。

こうした、本格的な武装と決死の体制による挑戦に対して、南軽井沢に総結集した日本の警察権力の最も恐れられたこと—その回避に全力をあげたことこそは、その「潜在的戦争状況」の「公然たる局地戦争への転化」——不法行為のとりしまり—逮捕—という警察的枠をこえて、せん滅戦の事態となること——、その中で、革命の殉教者を出す、ということであった。

彼らは、もしそうだった時の、それに続く物が武装闘争の拡大と高揚の時代となるであろうことを極度におそれ、予感せざるをえなかったからである。

彼らは、そうした事態の発生を防ぐという政治的目標のために、少々の軍事的犠牲は計算の上で、一切をそれ

ことは、それができない党派—そうしようとしな保守的党派に較べて明らかに異なる。

だが、ただ評価すればよいというのでは、問題は片づかないのであって、内在的止揚の糧とする仕方でなければならぬ。

②「武装銃撃戦断固支持」と中央委名で出した戦旗荒派は、自らが党的組織であるという基準を放棄し、連合赤軍の支援—支援組織の次元へと転落して語っているということに気付いてさえいない。

大衆に対して、権力の反革命宣伝に対し、その闘争を支持せよ、とすることと、連合赤軍に向けて支持を表明することとは別である。

③こうした状況は、今後形をかえて幾度か生起するだろう。それに対し、「玉砕は、ギリラの原則に合わない」という事をふりまわすのはその局面の性格を陰蔽するだけである。

四、浅間山荘武装闘争の

日本階級闘争における地位

これら「支持」諸派に共通しているのは、権力側の軍

事的要因を従属させた政治的目標をみていないこと、いかえれば、日本階級闘争におけるその政治的位置と性格をみていないということ（その政治的近視眼）である。それは、六〇年安保以来の、とくに六七年以来の日本における階級闘争の歴史的發展の中において位地付けられ、また現段階の日本における階級関係の中において、その性格は、規定されなければならない。

そうした時、浅間山荘武装銃撃戦の根本的な性格を、ゲリラ闘争の武装が、銃に質のエスカレートをとげたもの、ゲリラ闘争の高度な一形態とするだけでは、十分ではない。

国家権力に対し、せんめつ戦の体制で公然と武装対決しぬいたその闘争の性格は、いわゆるゲリラ闘争の性格——非公然に流動しつつ、権力のスキをついた攻撃をつみ重ねる闘争——をこえるものであり、武装蜂起の萌芽的性格をこそ、その根本的特徴としている。

その闘争は、追いつめられた中のものであり、勿論、行動による勝利への展望は存在していなかった。だが、そのことは、にも拘らず行われた、その闘争のもつ「萌芽—潜在的萌芽—としての武装蜂起の意義」をかえるものではない。

戦旗荒派等が、ゲリラ戦一般の評価の枠内にい

武装蜂起は、革命戦争の一環である、という闘争性は、ベトナムや中南米の革命闘争の中に、さらに、はっきりとみることが出来る。

日本における武装をめぐる階級関係——武装の歴史的困難と階級闘争からの徹底的隔絶——を前提とした時、組織的銃撃戦は、公然たる革命戦争—武装蜂起の性格をもつ。

従って、我々は、その闘争を日本における武装蜂起の最初の萌芽—潜在的萌芽—の闘争として明瞭に位地付けなければならぬ。

五、「決」死の武装蜂起路線と

その内在的問題

浅間山荘における連合赤軍の五名がおかれていた局面の究極的性格は、武装蜂起—革命戦争の行為は、死をもって実現—貫徹する以外にない、という極限的性格であった。

連合赤軍の闘争と行動の全体としての基本性格も右の局面の性格の中に凝縮されていると思われる。

現在の日本の階級関係の段階においては、銃撃闘争の計画は、武装蜂起としての萌芽の性格をもつと共に、国

るのは、あるいは、革マル派を典型として、解放派等（岩田派—半岩田派もその一つであろうが）「小ブル武闘路線のマンガ的自滅」として、反動的評価をこととしてしているのは、武装蜂起を階級情勢の全面的につまりの極点において行われる一点の行動と理解する一般的「武装蜂起論」を、多かれ少かれ前提としていることの結果である。

だが、それは、ロシア十月革命の蜂起を、その具体的情勢から捨象して、絶対化するところからくる教条的理念的武装蜂起論であるといわねばならぬ。

レーニン主義は、そうした教条主義とは無縁である。

また、中国革命における一九二七年の一連の中国共産党指導下の暴動と蜂起——南昌暴動を起点とする秋收暴動、海陸豊ゾビエトを中心とする広東蜂起（廣州コミューン）——は、それ以前のコミンテルンの蔭介石に対する妥協的追従的方针の裏返しの側面をもっていたにせよ（そして、暴動と蜂起は、敗北に終るのであるが）その武装蜂起は、中国革命戦争の新たな、真の歴史的出発点をなしたのである。

家権力との公然対決という戦争行為は、死を賭して実現する以外にない、という決死の性格をもたざるをえない。その闘争は、武装蜂起の萌芽の性格をもつとはいえず、しかしその闘争による勝利の条件が存在していない現段階においては、決死の行動によって革命戦争—武装蜂起の行為を実現するという性格——決死の武装蜂起行為——という性格をもたざるをえない。連合赤軍の闘争と行動全体の性格とはそうしたものであったであろう。

この点を前提とすることなしには、連合赤軍の行動に対する内在的把握とすることは、できない。

「小ブル街頭急進主義の必然的結果」とする解放派等の単純「路線切りすて」批判は、革命の原則的立場——「人民の武装による国家権力の打倒」——に立って、路線を批判するという原則性を欠いた無原則的批判にすぎない。

あるいは、銃撃戦の「支持派」と称するサラギ派は——彼らは、そのレットルのマスコミへの売り込みでこそとばかりになってくるが——この「リンチ殺人問題」を含む行動の問題について、「政治路線ぬきの野合」の結果である、としてゐる。

だが、こうした批判の仕方は、「理論の一致も

なく武装闘争に入った」ことを「狂気」だとした
マスコミの通俗的批判と何らことなるところがな
い。

こうした外在的批判は「組織問題」の独自の追
求を放棄する結果にならざるをえない。

連合赤軍の闘争と行動が、一組織全体による「決」死
の武装蜂起行動という極限的性質をもってしたことによ
って、そこには、組織問題が、異常に鋭く問われざるを
えない。

決死の行動に問われる組織原則は、自らの計画と行動
の意義を踏まえた革命的自発性・革命的自己犠牲の精神
による団結、これらに依拠し、またその卒先する核とし
ての指導部、以外にない。

権力からの防衛も、この原則に徹する以外にない。

不信による死の制裁・抹殺による組織防衛は、こ
うした決死の路線に伴う組織原則の根本を指導部が見失
った結果であり、またそれは、むしろ安易な組織維持・
防衛手段への転落であるといわねばならない。

こうした組織問題は、形をかえて、今後の日本階級闘
争の中に、幾度か問われるであろう。

他方、こうした組織原則上の問題は、程度の差こそあ
れ、我々の闘争と行動の中においても、しばしば問われ

てきたものであり、また問われるものである。

我々は、そうしたものとして、日本階級闘争の内在的
教訓とせねばならない。

だが、そのことは、同時に、連合赤軍指導部の権力へ
の屈服が、単に、組織に対する裏切りにとどまらず、権
力闘争の階級戦線全体に対する階級的裏切り行為に等し
いということを明確にすることでなくてはならない。

何故なら、武装蜂起は革命戦争（あるいは、その性格
をもつ行動）は、それがいかなるものであるにせよ、そ
の行動の基本性格と階級関係全体に対する普遍的規定力
によって全階級的影响力をもち、従って、その指導部の
担う責務は、全階級的なものとなるからである。

六、日本階級闘争の軍事問題

以上のように、連合赤軍の路線の性格を明らかにし、
それによって、そこに内在する組織問題を独自に追及し
ようとすること、それは、革命の原則的立場で、連合赤
軍の問題に相對そうとするならば、とらねばならぬ立場
と方法である。

我々は、その点を踏まえ、今や「路線」を問題

にし、さらにそこから、今日問われている軍事問題の性
格及びそれと日本革命の戦略問題の結びつきへと推し進
めねばならない。

連合赤軍の路線上の問題性とは何か。

我々は、これを一般的に語っても、ここでは意味がな
い。

あるいは、また、「路線を欠いた軍のみの行動」とい
う批判は、その裏返しであり、問題の所在の主観的否定
にすぎない。

連合赤軍の路線上の問題性とは、「決」死の武装蜂
起路線そのものもつ問題性である。

一組織全体が、決死の行動によって、革命戦争一武装
起の行為を実現するということは、現在の段階において、
蜂起の行動による勝利の現実的展望が存在していない、
ということによって、精神的行為一連合赤軍流に言えば
「捨て石」とならざるをえない。たしかに、そうした
精神的行為は、巨大な衝撃力を持つ（キリスト、ジャン
ヌ・ダルク）

だが行動の実現が、組織の実体的終息になる、という
こと一その精神的行為の実現に、一組織の全体の死を賭
すということ一は、組織は革命運動の観点からすれば、
不条理である。

路線の問題性とは、その内含する不条理性にあるとい
わねばならない。

革命運動における組織的玉砕（比喩ではなく、
文字通りのいみにおいて）の持つ不条理性は、
その路線全体の問題として語られねばならない。

そのことと、実際に、権力との公然たる対峙の
局面となつている浅間山荘闘争に具体的に関連さ
せて、ゲリラ闘争の原則的合理性（＝味方の保存）
を、「玉砕」という非合理性性に対して対置させる
こと、とは別のことである。

そして、この路線に内含する非合理性のゆえを
以って、一切を切り捨て断罪するとしたら一その
典型は、革マルである一それは、革命戦争一武装
蜂起とは、現在はおるか、未来永遠に無関係であ
るということを自己バクロしているだけである。
丁度、この問題における日共一赤旗の態度のよう
に。

では、その路線の不条理性とは、何に起因しているの
か。

それは、公然たる革命戦争一武装銃撃戦一武装蜂起の
性格をもつ闘争は、現段階においては勝利の条件が存在
していない、という点からである。

勝利の条件がないというのは、具体的には何か

第一に、革命戦争・武装蜂起への主体的戦線・武装遊撃組織が、数少く、質・量ともに萌芽段階であること、

第二に、公然たる革命戦争とは、公然たる根拠地を基礎とした革命戦争であり、根本的には、二重権力状態のことであり、日本においては、工場占拠・それをめぐる学園地域占拠を根拠地とする革命戦争であるが、その根拠地運動をめぐる主体的階級の条件も、また萌芽段階であること、である。

このことは、現段階における日本階級闘争の軍事問題が、非公然闘争の軍事問題→非公然軍事組織・非公然の軍事闘争・その武質の質の普遍化にあること、それによって、これまでの半公然・公然の権力闘争の戦線をも再編成しつつ、公然たる革命戦争の実現・武装蜂起の勝利への主体的条件を作り出していくこと、に存在していることを示している。

党組織こそは、非公然軍事組織の「根拠地」となっていかなければならない。すなわち――

第一に、非公然軍事闘争・非公然の革命戦争の展開とその積み重ねによって、武装遊撃闘争の組織及び戦線を拡大強化すること、それによって、人民の軍隊の中核へときたえ、成長させること、

付 諸党派の見解について

(1)三月下旬から、四月中旬にかけて、諸党派はそれぞれこの問題に関する見解を提起している。

諸党派にほぼ共通しているのは、連合赤軍の闘争と行動の全体を「破産」とするその基本視点である。革マル、解放、四トロ、日向派、さらぎ派、関西(蜂火)、どう派。

(2)この中、革マル、四トロ、解放はいわゆるリンチ問題が登場する以前、浅間山荘闘争に対する評価から、その態度は、右からの消極的、否定的(解放、四トロ)、革命的(革マル)評価であったのであり、彼らにとって「破産」という結論は、それなりに「一貫」しているのである。

だが、その一貫性というのは、権力闘争の戦場に対して、そこにふみこむ方向をとらないといういみでの右翼的・反革命的の一貫性に他ならない。

従って、彼らに共通する「批判」の基準は、単純本質還元主義のイデオロギー批判という疎外された形に他ならない。革マルの毛沢東主義に対するマルクス・レーニ

第二に、公然たる革命戦争→人民の戦争→の根拠地を目指し、それを闘い取るために、工場→職場闘争を推し進めると共に、それによって、地区的組織の網の目を作り出すこと、

第三に、以上の第一→第二の任務の組織的主体たる非合法党の建設→強化。革命の組織原則による中央→地区党の組織。

連合赤軍の闘争と行動は、戦略・戦術上の問題・組織問題の重大な誤り・屈服→転向を含む事態を伴っているが、武装蜂起→革命戦争の潜在的萌芽・萌芽の第一歩である。

それゆえ公然たる革命戦争の実現・武装蜂起の勝利に向けて、現段階の日本階級闘争の性格を明確にさせ、そこから問われている課題にこたえること、それが、日本階級闘争における我々権力闘争の戦線の回答であり、任務とせねばならない。

一九七二・三・一五

(文責・水沢史郎)

ン主義の外的対置。解放派の「スターリン主義的プランキズム批判」。四トロのトロツキー革命論(軍隊反乱論)の教条的対置。

こうしたイデオロギー主義的批判は、マルクス主義・ドイツ革命・ロシア十月革命のイデオロギー主義的教条化の結果である。

(3)いわゆる大量リンチ問題が、バクロされる以前の段階において、「無条件の断乎支持」を我先にと表明したさらぎ派・日向派等が、リンチ問題がバクロされるや、手の平を返すように「連合赤軍の破産」を総括し、宣伝したことは、浅間山荘闘争の渦中における彼らの態度→自称蜂起派としての売込みに走ったさらぎ派・党的立場を放棄した地点から支持表明を行った日向派の態度→の必然的な帰結である。

また、どう派は、「革命運動は、人道主義運動ではない」という常識的一般論を、一般大衆に対してお説教することをもって、態度表明にスリカエている。

こうした中途半端な態度をとる諸党派に共通するのは、現段階の日本階級闘争における連合赤軍の闘争路線の客観的性格を明確にさせ、そこに内在する組織問題を明らかにするという立場をとりえていない、ということである。

同様のことは、問題の原因を、指導者森の個人的資質に還元している赤軍派（獄中）の総括についてもいえる。(4) こうした中で、赤報（R・G）だけは、リンチ殺害問題を、独自の組織問題として追及している。

すなわち、「連合赤軍の組織問題」は、その「共産主義化論」にあるとし、「分権主義」、「水平主義」に対する「中央集権主義」をその教訓とし、また、連合赤軍の闘争目標とその行動の方法を前提とするならば、「殺害による内部粛清は、当然の帰結」である、としている。こうした「赤報」の見解は、一面では革命の原則の至上性に対する小ブルジョアの反発と動揺に対する予防戦ではある。

だが、その組織問題は、「分権主義」・「水平主義」に対する「中央集権主義」という政治路線からきりはなされた純粋な組織問題として考察されるのではなく、その「決死の武装蜂起路線」に伴う組織問題として追及されねばならない。

それゆえに、その内在的教訓とは、決死の行動に要求される組織原則を明確にさせることであり、また局面としては（路線としてではない）それが今後例外的なものにはとどまりえぬ以上、その組織原則を、革命党の組織原則の中に内在化する、ということである。

「赤報」は、組織問題を、政治路線から抽象化してしまつたことよつて（中央集権主義の一般的強調）、こうした方向への追及の道を閉ざしているようにみえるがしかし、こうした点を内含していない中央集権主義は、今後の日本階級闘争における中央集権主義としては、決して十分といふことはできないであろう。

拠点根拠地闘争の前進のために

一、我々の拠点闘争の全般的総括

労働者ソビエト運動をどう切り拓くのか、という問題は、岩田路線との党内一分派闘争の一つの柱である。

それは具体的には神田合同労組アサヒ無線の闘争（六九・四・七）、志村化工闘争（六九・七・一一）、全通大崎闘争（六八・一・七〇・二）、東京R自販闘争（六五・七・二〇・二）の総括をめぐる問題である。そこに共通する問題は現段階の階級闘争における行動委員会及び闘争委員会の組織的位置付けの問題である。そして根本的には、工場―職場闘争を権力闘争においていかに位置付けるのか、という問題である。

一、岩田路線による拠点労働者組織の解体

これら、とくに全通大崎―R自販という長期にわたる血のにじむ努力の末に、我々の労働戦線の拠点とし、またブンド七回大会―どとう派との再分裂の中においても

防衛―発展させてきた拠点に対し、岩田路線はそれを反乱の教条化によつて解体させてきた。

○アサヒ無線……組織づくり（主体）の準備の軽視。内部の主体に即した方針―組織再建への視点の欠如。外部部隊に依存したその欠陥の外的ビホウ。その結果とし

ての内部残存部分の主体性の解体と内部的再建の展望の途絶。

○志村化工……盛り上った解雇撤回闘争が日共組合指導部の組合主義方針の下に集約し終東された。この後退の戦略的意味を我々が明確にせず、一・一三突入闘争によって戦略的再建とそれに基づく持続の条件を失ったこと。

○全通大崎……大崎闘争委員会的位置付けの曖昧性。行動委の果敢な闘いにも拘らず、その方針上の結果としての職場闘争方針の欠落。民間の方針に介入し、職場を制圧する方針の決定的局面での欠如（六九年一・一三等）。集約点としての街頭反乱の観念的設定。大崎闘争委の解体である。

○東京R自販……職制に対する職場制圧戦を、精力的に拠点営業所で展開しながらも、街頭決戦（本社周辺での対機動戦、本社占拠）にて集約しようとした観念的設定のために、持続の展望を失ったこと。行動委の綱領の個別革命的限界。行動委の組合執行部との連関の欠如。

二、我々の再建への視点

従って七〇年六月の前衛四〇号岩田論文一党としての

論のように、それを考える」という傾向は打破され尽さねばならない。

⑤このプロレタリア戦線においてこそ、「具体的情勢を具体的に分析すること」、「運動を教条の鑄型にはめこまぬこと」が問われるものであること（自らの運動組織の歴史的性格及び大衆活動家との歴史的關係をふまえること。また組合の位地及びその性格を具体的にふまえること）

⑥そのなかにおいて貫かれなければならない原則は——
(イ)ソビエトMの目標は、革命II人民の軍隊の根拠地を闘いとることであり、根拠地拠点闘争として位置付けられねばならない。

(ロ)資本家I職制に対決する闘争をおしての非公然I公然の階級組織の確立と強化。党細胞の確立。行動委組織の確立。組合主義的諸党派への対決。労働者革命軍の中核への展望と訓練。

(ハ)ロの闘いをおしたプロレタリア大衆の闘争意欲の解放。それに基づく大衆の結集。

三、全通大崎闘争（六八・一〜七〇・二）

総括の核心問題

全通大崎闘争の総括は拠点総括の中心問題である。

組織的継承性の切り捨てと、新左翼主要打撃路線——
Iは、ソビエト革命とそのためソビエト運動を党派性としながらも、実際上はその主体たるべき職場組織を解体させてきた事実を、六九年秋期闘争における「我々（前衛派）の新左翼への敗北↓安保闘争の敗北」という勝手な自己満足的総括によってスリカエルものに他ならなかった。

我々は、こうした拠点の現状の確認と、大阪中野の職場闘争等を実践的基準とするその独自の拠点闘争の総括から、七〇年八月末、次の点を教訓とし、その下に岩田派に対する我々の拠点労働者Mの推進を開始した。

①職場I工場内部の労働者行動委を主体とした運動。
・労学行動委等の外部部隊による代行主義の排除、ソビエトMの主体の原則的明確化。

②反乱方針の自己目的々設定II教条的設定の排除。戦術目標の具体的設定。

③「反乱かカンパニアか」「組合（自治会）か行動委か」の二者択一の排除。ソビエト的戦術と組合的戦術とのコンビネーションの再設定。観念性の打破。

以降の今日に至る闘争経験を経てこれに付け加える必要があるのは

④「闘争の型をつくる」（あるいは、岩田の職場闘争

何故なら我々I前衛派は、その最終段階において組織全体としてこの問題にとりくんだからである。

また、大崎の職場部隊は、六〇年代後半の労働戦線における最も先進的な部隊の一つであったといえるからである——

①青年部を拠点とした大崎職場グループは、品川反戦の中核部隊として、六七年の街頭実力闘争への結集をおして、実力部隊（青年部反戦）へと成長し、

②それにより、六七年年末の全国物だめ闘争の高揚の一環を担い、さらに、それに対する六八年一月の無差別大量処分に対して、連日の職制への弾がい追及、局長室突入闘争を展開し、全通民同への対決をなしたとげた。

③全通民同の統制処分どう喝に対する対応をめぐって反戦派内部に分化が生じ、そこから（弾圧粉砕）行動委への再編成がなされた（六八・七）。

④六八年秋I六九年一月東大等をおして再結集した行動委が、六九年六月、大崎闘争委員会に転化し、その下に六九年一・一三闘争を果敢に闘うが、大崎闘争委を職場闘争組織として形成する基本方針がとられないうちに、そのスキをつかれた活動家への解雇攻撃によって、闘争委は解体する。

ここには、六七〜七〇年の労働戦線をめぐる闘争の普

遍的問題が凝縮されていると共に、何よりも大崎闘争委員会の組織問題の中にソビエト運動―拠点根拠地闘争の前進に向けて明確にさせねばならぬ主体的総括問題が存在しているからである。

(1) 岩田派の破産の上塗り総括

岩田派の大崎総括の結論は「組合の本質はブルジョア的」であり「組合は解体の対象である」あるいは「反戦組合主義者の粉砕が、民同粉砕の突破口である」(前衛五二号)ということを「確認させる」(?)ということであった。こうした岩田派の大崎闘争総括は、我々の拠点闘争の独自の総括と新たな工場闘争の着手に対する彼等の対応ではあったが、しかしその内容は、大崎闘争の破綻の上塗り総括以外の何物でもなく、その総括の実践的結論は、「右からの組合解体に、左からの組合解体を対置せよ」(前衛五六号)とか「組合主義春闘を解体せよ」(前衛五四号)とか「全日産工場反乱に総結集せよ」(前衛五五号)一体どこに結集すべき日産反乱があるというの(だろうか)とかいう空文句の文字通りのラレツだけであった。それは、岩田―岩田路線―岩田派の破綻であり、大阪中野職場闘争等を実践的基準とする我々の拠点労働運動総括に対して、全くこたえることができなかった。

た「行動パターンが単純化されていた」として、モザイク模様のように存在している行動様式をたまたま岩田派の誰かが単純化してしまった問題なのでもない。大崎における六九年一一・一三や七〇年一・一三―一・一四の根本問題は民同方針への内在的介入と対決をおして大衆を行動に組織するという方針が問われていたにも拘らず、そうした方向を無視して硬直状態を激化させたことなのであった(そしてその結果としての街頭決戦の空論的設定による内部解体の決定的促進)。

このことは根本的には、「反乱の教条化とそこからの大衆への反乱の強制」組合の「単純解体路線」という七〇年一月以降に路線として明瞭になった岩田路線の問題であり、より総体的には、前衛四〇号路線の問題である。しかし大崎闘争に即してみたときには、こうした大崎闘争委員会の組織問題として総括されねばならない。

(2) 大崎闘争委員会の組織問題

すなわち、大崎闘争委員会の組織問題とはそれまでの職場内拠点(青年部)からの同時に組合組織一般からの単純召還主義の形をとまって闘争委員会への形成がなされたこと、従って、闘争委員会としての職場内部における位地を形成・樹立しえなかつたこと、にも拘ら

ったことをバクロしていたのである。

(2) 半岩田の中間派による大崎闘争総括の問題

岩田派の総破綻に対して、半岩田の中間派の大崎闘争総括(前衛六〇号山野辺署名文)は、結局のところ当りさわりのない曖昧さと抽象性―「戦術の計画性と多様性」等―によってえぐり出すべき問題をボヤかしている。かunjんの点―指導の誤り―の問題を、「指導の放棄」の問題へとスリカエルことによって総括すべき組織上―戦術上の問題を棚上げにしているのである。

組織問題については「闘争委員会」という形式だけから、「闘争委員会」という組合から自立した闘争主体が形成された」としてこれを単純に讃美しているにすぎない。「何故、一―二月の解雇攻撃に対して大崎闘争委を主体とした内部対決が展開できなかったのか、何故解雇攻撃によって一挙に消滅し去ったのか」という大崎闘争の核心的組織総括問題とそれに関わる路線上の問題意識が欠落しているのである。

そのことを戦術的次元にうつせば、問題の所在は「大衆的サポーター―戦や行動委独自のバルチ行動などの多様性、それらの結合がみられなかった」というような、戦術の一般的多面性の欠落の問題にあるのではなく、まずこうした組織的問題性(あいまい性)が闘争委員会―ソビエトという形式的理念の下に閉鎖的に合理化されていたこと、である。

先にもふれたように、全通大崎における職場闘争―反民同闘争―地区反戦―街頭実力闘争への職場内拠点は青年部であった。

青年部は、戦闘的組合運動の拠点から六七七年をおして地区反戦―街頭実力闘争への職場内拠点へと成長することによって、組合活動の枠を突破した職場制圧闘争への拠点へと転化していたのである。(六七年年末闘争)六八年一月処分粉砕闘争)

また、だからこそ、民同の統制処分どう喝に対し、組合活動の拠点として組合主義的にこれを維持しようとする部分と弾圧粉砕行動委の独自の組織化をはかりつつ、これを階級闘争の拠点として維持しぬこうとする部分に分化した。(六八・七月)

従って、こうした職場内拠点―青年部―論理的には組合組織一般からの召還―民同との内在的対決からの召還の上には、それまでつちかかってきた闘争の水準・活動家大衆との具体的関係をふまえて、行動委を、職場内闘争の主体としての闘争委員会として構築させていくことはありえなかつた。

だが、六八年秋から六九年前半に至る三里塚―東大―新宿の街頭闘争で再結集をとげた行動委員会が闘争委員会に転化する時、この点の曖昧化が同時に始まったのである。すなわち、大崎闘争委員会の実態は、街頭闘争及び拠点支援闘争への行動組織であり、職場内組織としての行動委組織としての性格は未だ未形成であった。それゆえ大崎闘争委員会という形式―それは形式上からいえば職場闘争組織である―に転化させることはその性格を決定的に曖昧にさせる危険性をもつものであり、それには厳密な組織的地位付けが問われていた。にも拘らず、その移行が安易に行われたばかりか、逆に「闘争委員会―ソビエトである」として、それを組合に機械的に対置させて方針を設定するという傾向（闘争の実体が形式の犠牲となる傾向）を拡大していった、ということである。それが、大崎闘争委員会の解体の根本原因である。その明確化こそがこの闘争を生かす総括である。

闘争委員会というその形式にだけ目を奪われて組織問題に目を向けようとしない中間派総括は、大崎闘争総括になりえていない。それは、麗しき抽象言辞によって岩田派の破産の上塗りの総括をとりつくりうという役割をはたしているのである。

（七〇年七月の大岩文書の基本的性格は「反乱の強制」

たのであって、その境界の打開もこうした運動体を前提にして行うという視点こそが問われていたのである。従って行動委を組合執行部と無関係なものとして地位付けたり、執行部―第一組合の単純切りすて傾向の裏面として地位付けてはならなかったのである。R行動委の急激な解体はその結果であるとして総括されねばならない。

(四) 個別革命論の誤謬―行動委綱領―

こうした問題は、R行動委の行動綱領の中に集中的に反映されている。それは具体的な任務の規定を欠き、その代りに、「職制追放↓職場の労働者秩序確立↓三菱資本と資本家階級の粉砕、労働者権力の樹立」という形で行動委の直接的任務として「職制追放」から順次に積木される革命を規定するというR自販の個別革命論をその内容としていたからである。

(五) 「北西地区委」署名の「総括」について

このR闘争に関する北西地区委署名の総括は、細部にわたって具体的に展開され、先の山野辺署名大崎総括の抽象性に対して著しい特色をなしている。そしてまた、当初の部分の問題提起には、岩田路線を問題とする方向に向いうる部分も存在していた。だが、それは、こうし

路線の下に、「労働者組織の解体を、労働者メンバ―の自覚の不足の問題としてネジ曲げ、指導方針を棚上げする岩田的図式」にそって、肉付けを行ったものである。が、大崎闘争委員会の抱えた組織問題は反映されている。

四、東京R自販をめぐる問題

(一) 革命派の担う第一組合と行動委

同様のこと―行動委の組織的地位付け―は東京R自販闘争についてもいえる。

ここにおいては①一九六五年に我々のイニシアチブの下に組合が結成され、以降五年間、その執行部の下に大衆的戦闘的労働運動が展開され、②それによって自動車販売会社でありながらも三菱資本に対する抵抗体へ成長した。③こうした、大衆的戦闘的労働運動の徹底した精神的展開の中から、その歴史的展開を土壌として行動委運動の公然たる展開の条件も生まれたのである。従って、ここにおいては、行動委員会の第一組合執行部との組織的連関の問題はより鋭く問われていたはずである。

Rにおいては、組合執行部を核として戦闘的大衆的労働運動が担われてき、そうしたものとして五年間にわたる運動の歴史的展開と大衆との関係の形成が存在してき

た個別革命論的路線の枠を前提としていることによって、結果的には問題とすべき「行動委の純粋培養的性格の組織問題」とその「個別革命論的行動委綱領―岩田路線」を再確認するという結論におちいっているのである。

このことは七〇・二月以降資本の攻撃が第一組合の壊滅に向けて必然的に設定されている事態に対し、それに対する対決を「頭を悩ますことではなし」として、第一組合への敗北主義的過少評価の傾向におちいっていることも無関係ではなし。

五、大阪中郵における対職制闘争

―職場末端の行動委運動と、第一、第二組合

以上の全通大崎と菱和の総括は、両方ともに、組合青年部・組合執行部という組合組織を闘争の拠点として運動を組織し、その中からそれをのりこえる職制粉砕―職場制圧戦が成長し、その行動委組織が問われたところであり、その総括は、両者の連関性の問題であった。

（だが、勿論そのことは「組合的組織とソビエト的組織の一般的連関性」を結論づけることではない）

これに対し、大阪中郵の場合には、我々の位地と運動とは明らかに異っている（「大阪中郵における闘いの総

括と現状(参照)

①大阪中野では、青年部一執行部の関係からは相対的独自に職場を基礎とした対職制つるしあげ闘争の部隊一運動隊として形成一成長してきたのである。

②全通における(特に、全通に鋭く表現されている)労働者に対する管理一支配一監視機構としての職制体制との対決こそ、最も基本的な対決点であるがゆえに、その職場闘争は、中野三〇〇名労働者に対する普遍性をもって、同一執行部を揺さぶってきている。

③だが、この職場運動が、組合執行部からの相対的独自性を保っているということは、組合組織からの単純な訣別一組合からの脱退・行動委の裸の公然化、組合解体の路線化と宣伝一をいみしてはいないのである。

教訓化しなければならぬのは、組合役員選挙に集約される組合的集約体制への連帯を拒否して、組合執行部との間に一切のなれあいの余地を発生させず、第一組合の中にありながら、強力な独自性を保持していること、である。

④右の③の問題は、全通においても因鉄におけると同様、官の攻撃が第一組合の組織攻撃に主要に向けられる、ということからも具体的に問われている。

(権力の攻撃が、第一組合の破壊にあるのに対し、「

大衆闘争のことならその行きつく先をすぐに思いうかべすべてがわかったよな気になっている「左翼的態度」や、「組合では闘えない」という行動委運動の理念の下に、この闘争の示したエネルギーと大衆の創意を見下す態度をとる岩田の一半岩田の態度そのものに対する平手打ち以外の何物でもなし。

我々は、「大衆の闘いに学ぶ」という姿勢をまず新たにしなければならぬ。

(一)Sの経営者の基本的態度は、「組合を認めない」ということであり、「団交拒否」はその表現である。

それに対し、「自分たち一組合をみとめる」というエネルギーは、対等なものとしてみとめよ、ということであり、そこには、本質的な要求がこめられている。

従って、闘争の性格は、根本的なものを含む。

それゆえ、経営者を大衆の力の前に屈服させて組合をみとめさせること、組合の意志を無視することの出来ない関係を闘いとること、それが基本目標となる。

そのために、経営者一大衆との直接的対決関係のもとに、追いつめることが基本戦術として問われる。

これに対し、本部は、経営者一大衆の直接的対決の関係を、経営者一本部の関係へと中和し、ポヤカシ、スリカエるものとしてふるまった。

右からの組合解体に対し、左からの組合解体を対置せよ(岩田派)などというのは、愚劣をとかりこしている。

⑤中野職場闘争の基本内容は、第一組合切り崩しの先兵をつとめる職制に対する追及とつるし上げとして展開している。

そして、組合的集約を許さず、その闘いをより鮮明におしすすめるために、新たな組織問題が検討されている。

六、三多摩S製作所の工場とまりこみストライキ闘争

この闘いの二月二日までの経過については、資料に生ききと語られている。

(一)一月二十七日の度重なる団交拒否に対する怒りの昼休み集会、そこから時間内集会へのくいこみ半日ストライキへの強行転化、その夜における翌二八日のストライキ決定。親会社の金型(生産手段の中軸)の制圧。とまりこみストライキ(工場占拠への第一歩、ゼネ石闘争や日産車体の闘争は、このとまりこみ闘争の戦術に達していない)への発展。闘争の中止一就労を迫る統一労組本部(以下本部と略)に対し、大衆ストライキの持続のために就労戦術を逆用したこと。

こうした五日間の工場とまりこみストライキ闘争は、

(二)このような諸関係は、決してS製作所の特殊一例外的狀況なのではない。

むしろ、中小零細企業においては、広くみとめられるものである。

民間の大独占企業の大工場にあっては、資本の労働者支配一搾取は機構的である。

そして、その支配一搾取機構の潤滑油として同盟系組合が長期にわたり定着している。

これに対し、その大独占企業大工場の周辺に群生している中小企業においては、その対労働者の支配一搾取関係は、経営者の直接的関係を広範に残し、また伴っているものであり、そうした非機構的支配のために、経営は組合の存在を許し、またこれを利用するという機構と余地をもっていないからである。

それゆえ、労働者は、低賃金と無権利状態の下におしとどめられ、しばりつけられ、組合結成の試みは容赦なく抹殺される。

(四)こうした関係の下にある中小零細企業において、組合を結成し、要求を掲げて公然と登場するということは、組合の存在をみとめない経営者に対しての、組合結成に一挙にエネルギーを注ぎこみ、結集させる労働者大衆の力関係の基本的決着を問う闘争の開始をいみする。

組合の形式をとっていようと、闘争の性格は反乱的であり、経営は倒産のどう喝で対抗してくる。

従って、経営一職制を一気に追いこみ、彼等を屈服させ、そうしたものとして組合労働者の意志をみとめさせていくこと、それ以外にはない。

(五)ところで、この闘争に対し、前衛・Sグループは、「闘争に入らたのが(準備不足だから)まちがいである」などとし、民同一協会派の闘争の中止の立場に連帯し、そうした評価を恥かしげもなく続けている。

第一に、そうした態度には、「大衆は(我々も)、闘争の中から階級闘争を学び、闘争の中でこそ成長する」というプロレタリア階級闘争の原則性、またそのためにこそプロレタリア運動の内部での我々の任務と指導性が問われるという基礎的原則さえもが欠落している。

第二に、仮に組織的準備に不十分性があつたとしても、しかし、組織的準備というのは、闘争をおす以外にないのであつて、行動委の理念のお説教などではない。プロレタリア大衆が、自らのイニシアチブと創意で「力関係の基本的決着を問う性格の闘争」に入つた以上、その貫徹と勝利的決着のために全力を尽すのが原則である。民同一協会派と共に、「入るべきではなかつた」などと言つて、現に継続している闘争に対するのは無原則で

位地付けの問題を基軸として再整理すると共に、全般的総括とさせたのである。

我々はこの全般的総括に基づいて、地区党建設を組織

二、大阪中郵における闘いの総括と現状

最初に大阪中郵の状況を記したい。大阪中郵の職員数は二五〇〇名余で全通一〇〇〇名、第二組合(全郵政)一三〇〇名、未加入一〇〇名程度である。第二組合が過半数をとつたのは一昨年末であるが、その経過を若干説明しよう。

第二組合(全郵政)が発生したのは、昭和三七年前後である。ところがこの大阪中郵の第二組合を結成したが、当時の全通中郵支部の三役クラスにいた者であつた。更にそれまでの全通中郵支部は、再三再四自己の出世のためにステップとして利用されてきた。現在の現場職制の数多くは、かつての全通中郵支部の支部長や執行委員だつたのである。こうした一連の全通指導部の裏切りや官となれ合つた組合方針に中郵労働者は、限らない不満と不信感をもつていた。

一方官は、昭和四〇年の航空搭載実施をはじめとして

ある。

第三。以上のことは、「組合は組合。行動委は行動委」として、両者を単純に分離し、一方では、組合は本来的に限界があるのだからとして、組合に結集するエネルギーを組合主義的枠をこえて発展させていくための対応を放棄し、また他方では、その口実として行動委組織の未形成をあげるといふ前衛・Sグループの組合主義一組合官僚主義一と、その裏面としての「行動委の特効薬」といふ理念の行動委運動論の破産を示している。

七、工場職場闘争の

戦略的意義と具体的位地

以上の我々の拠点根拠地闘争の全般的総括をとおして、明確化させねばならないのは、工場一職場闘争の戦略的意義と現段階の階級闘争における具体的位地である。

我々の結論は、それは、国家権力打倒のための公然たる根拠地一人民の軍隊・革命戦争の拠点一を闘いとる闘争として明確化されねばならず、それゆえに、工場一職場闘争は、拠点根拠地闘争として位地付けられ、買かれなければならない、ということであつた。

ここにおいて我々は、その視点の下に七〇年八月段階の拠点闘争総括の内容を、行動委運動の具体的な組織的集約点とする拠点根拠地闘争を全力を挙げておし進めるであらう！

合理化を強化し、大巾慣行剝奪等の労働強化を強制してきた。しかし全通は、ほとんど職場からの抵抗反撃闘争を取り組まないうちに、過酷な労働強化を許してしまつたのである。こうした状況を背景に、個人防衛路線に逃避する多数の労働者が、第二組合へ流れ込んだのである。このような困難な状況の下で、昭和四四年三月郵便課Y係で慣行防衛闘争が展開された。これはわずか一〇分間の慣行休息であつたが、多くの問題を含んでいた。先ずほとんどの係にある慣行の内では何故Y係を選んだのか。それには三つの理由があつた。

①Y係は航空便開設に伴つて作られた係で、他の係に比較して戦闘力が弱かつた。(郵便係の内でも二組が多い係、一組対二組が六対)②だがそのY係に、我々が数名の部隊をもつて登場したため、大阪中郵に於る唯一の反戦派(地区反戦)であつた我々をパージする必要が

あった(その年の七月の機械導入をひかえ)。③郵便課の内でも航空便等の結束で最も重要な係であった(業務上)。官は我々と大衆を分断し、更に我々の部隊を切り離す計画であった。

だが強化される一方の労働条件に大きな怒りを持っていた労働者は、何もしないで慣行休息を剝奪されるよりも、徹底した職場抵抗闘争を選んだのである。しかも、この闘争は、それまでのくさりきった組合指令で始めただけではなく、職場討議を重ね自らの意志で決意したのである。こうしてほぼ職場全体が、三月から六月まで約三ヶ月間職制の命令を拒否して実力で慣行防衛を展開したのである。遂に六月四日課長自身が業務命令を發出し、処分のどり喝をかけてきた。それに対して我々は、就業開始から連日三〇分一時間の職制つるし上げを展開した。職制はますますヒステリックに処分のどり喝を繰り返したがそれに比例して我々は、職場占拠を拡大していった。(事実上の時限ストを部分的職場占拠で闘う)こうした官の予想に反した戦闘的職場闘争の前に、官は慣行剝奪を断念した。

そしてこの闘いをバネにして、七月の機動隊による機械導入阻止闘争へともつれこんだのである。

しかしその直後我々の最も先進的メンバーは、強制局

出された。

①戦闘的職場闘争は、ますます全通をピンチにするので、官との対決を避けて組織拡大に限定した活動を行うべきである。②組織温存路線(社共)③全通指導部の日和見をつきあげ、戦闘的グループが組合機関を掌握する方針。④組合内左翼反対派路線(革マル)⑤職場を中心官との具体的対決を基軸に戦闘的労働者を行動委員会に結集して、行動委員会のヘゲモニーによる職場闘争によって官の攻撃を粉碎しようとする方針。⑥行動委員会路線(我々)

こうして我々は極めて不十分ではあるが、昨年年末闘

三、ソビエト運動の前進のために

全通大崎闘争の総括

はじめに

六八年一月の処分粉砕職場闘争から、七〇年二月の突入闘争に至る全通大崎闘争が敗北してから、二年余りの年月が流れた。そして、当時同志的に闘った人々もちりぢりになっている。その敗北以降、この全通大崎の闘い

内配転による闘争庄殺の弾圧攻撃を受けた。しかも全通はこの配転に対して、形式的抗議闘争と裁判闘争へのすり替えによって職場抵抗闘争を中断し、敗北を強制したのである。そこで我々は、それまでの(山ネコ闘争を展開する)組合内左派労働研としての位置から訣別し、行動委員会を準備したのである。

それ以降行動委員会は、大衆職場闘争の中核として、行動委員会の非公然部隊の戦術と大衆的職場闘争の結合を目的意識的に追求してきた。

一方官は、職場の支配体制を強化するためありとあらゆる方法を用いた。特に部制の導入によって職制を増し、その管理支配体制の強化は以前の比較して驚くべきものであった。しかも第一組合から第二組合へのオルグが多数の不当労働行為をもって行なわれ、新規採用者に対しては最初訓練期間を設定し、別室にて職制が第二組合への加入書に捺印させた。こうした攻撃の中で杉並を突破口に労働闘争が展開された。

しかしこの労務政策変更闘争は、現場に於ける職制支配体制にほとんど打撃を与えず事なく大臣との確認書をもって終わった。こうした合理化と組織破壊攻撃を基軸とした非和解的攻撃は、従来の民同型取引闘争を基礎から崩壊させた。この組織のマヒを突破するため三つの方針が

争でも唯一郵便ダイヤ開設にともなり合理化を物だめ闘争をもって闘った。

以上大雑把ではあるが、中郵の闘争を総括し、最後にもう一度整理してみたい。(1)行動委運動は組合を破壊(切り捨て)すれば建設できるものでなく、対資本との闘いを通して、むしろ結合しつつ行動委にヘゲモニーを獲得することが必要である。(2)行動委は労働者・学生・人自身の大衆闘争機関である。したがって行動委のいかなる方針も(特に工場の場合)学生組織等によって代行することは間違いない。(3)更に行動委運動ソビエト運動と、対権力闘争を結合しなければならぬ。(西)

の総括は、「前衛」内部において何度か試みられた。しかし、この大崎の闘いの総括は、岩田派の破産した方針の根本的な再検討の突破口になり得ずにいる。

我々は、このような現状において、拠点根拠地運動という我々の視点から、再度大崎闘争の総括を展開することは、極めて重要であると考える。

玉川 浩一郎

一、全通労働運動の位置

だれもが知っているように、全通は日本の労働者階級の基幹部隊―公労協―の一つであり、その動向は、日本労働運動に大きな影響力を持ってきた。そこで当然、社会共はもろん我々左翼諸派も、全通戦線に対する影響力を持つために、活動してきたし、現在も全力を挙げている。また、政府・支配者側も全通労働者の闘いを圧殺し、彼等の支配体制を確立するために、きびしい攻撃を行ってきたし、更にそれを強めようとしている。現段階においては、国鉄に続く全国的な職場・現場攻防戦の焦点なのである。しかし、五〇年代後半から、六〇年代前半に到るまでは日本資本主義の高度成長にみあって民間と当局の取り引き的な闘争関係のわくにおさまっていた。しかしながら、この取り引き的な闘いは、一方において職場における当局の支配の強化をもたらしたが、他方においては、青年労働者を中心にした不満を同時的に蓄積していった。これは勿論単に全通に限らず、全般的に言える傾向であった。

二、反戦青年委員会と全通大崎

このような全通戦線の傾向に注目し、介入しようとした

いた我々左翼諸派は、六四―六五年のベトナム反戦闘争―日韓闘争という街頭政治闘争を前面に押し出した。このような青年労働者の職場における不満のエネルギーが、この街頭闘争に結集した。まさしく第一次反戦青年委員会運動にほかならない。全通東京青年部は、社青同解放派が、社青同という民間の公認的政治組織の立場をフルに利用して、このヘゲモニーを取っていた。全通東京青年部の主力は南部ブロックであり、その中に大崎が位地していた。

三、ブンド（マル戦派）と全通大崎

(イ) 全通大崎と品川反戦

この大崎の職場部隊と、ブンド（マル戦派）が指導してきた立正大の部隊がこの反戦青年委員会運動の中で接点をもったのである。すなわち、品川反戦結成とその闘いを通じてであった。大崎の職場グループは、社青同内の分派闘争において、解放派がその実体をバクロした時、自ら解放派を突破し、新たな質で武装された部隊に成長したのである（品川労研）。

(ロ) ブンド七回大会―マル戦派の分裂と品川反戦

四、全通大崎における

職場闘争と行動委員会運動

(第一段階)

高揚した六七年年末闘争、六八年一月の処分粉砕職場闘争の爆発、六八年七月処分撤回闘争。

(第二段階)

七・一〇処分撤回闘争の戦術をめぐる内部対立の出現
↓品川労研の解体。弾圧粉砕行動委への再編成と再組織
↓東大闘争（六九年一月）。

(第三段階)

六月大崎闘争委の組織↓六九年一〇、十一月闘争↓七〇年一―二月の処分弾圧粉砕闘争の展開と敗北。大崎闘争委の解体。

五、各段階における行動委運動の問題点

第一段階に至る闘いは、基本的にはブンド（マル戦派）が六五年以来の労働戦線に対する組織戦術としてとってきた組合内左翼反対派戦術であった。すなわち、全通民間が提起した物ダメ闘争、形式的処分撤回闘争等の方針を逆手にとって大衆的実力闘争に変形し、民間をつきあ

六七年二月の砂川闘争から始まる第二次「反戦」運動の時期には、この成長した大崎を軸にした品川反戦の全盛期であった。このことは同時に、この第二次「反戦」運動の高揚を主体的に担った統一再建ブンドとその指導部―マルクス主義戦線派との関係がますます緊密になっていった時期でもある。しかしマル戦派が、一〇・八、一。一・一二の二度にわたる羽田闘争を自ら切り開きながらその闘争がもたらしたところの巨大な意義についての総括をめぐるブンド党内―分派闘争から、召還を意味する七回大会における分裂方針に陥入ったということは、ブンド―マル戦派の分裂・分解の結果しただけではなく、「反戦」へのヘゲモニー闘争からも大きく後退させたのである。

しかも、さらに、我々は六八年九月の前衛派結成にあたり、進行していた全学連、反戦のセクト的分断の傾向に対し、もはや「反戦」の歴史的役割は終り、むしろ反動的にすらなっているという岩田路線を受け入れ、自らも「反戦」への関りから手を引いてしまったことを総括しておかなければならない。ブンド（マル戦）の分裂と分解と品川反戦に対する放棄という困難な中で、大崎の部隊は職場闘争を中心に品川労研として闘っていた。）

げ、その日和見主義をバクロし、民同指導部と大衆の間に、くさびを打ちこみ、我々のまわりに戦闘的部隊を結集するという方針であった。この組織戦術のもとに、大崎の戦場部隊は青年部を拠点とする独自の位地を作り出した。

そして、その戦場内拠点(青年部)は、単に戦場内にとどまらず、砂川―羽田―佐世保―王子の実力闘争と反戦青年運動の拠点へともなることよって、さらに、大崎―南部全通の内部における組合内左翼反対派運動の枠をこえる対戦制・反民同の戦場内拠点へと成長しはじめたのである。

これが六七年年末闘争の高揚から、連日の職制弾がい、局長室突入、一・一七南部決起集会と発展した六八年一月の大崎における処分紛争闘争であった。

こうして、大崎の戦場部隊は、全通東京地方民同との政治的対決にまで深りつめ、そのことよって、南部の全通青年労働者の指導部として登場したのである。

また、まさにこのことよって、民同の処分どう喝に對し、いかに対応するのかが大崎グループの中心問題となり、そこから内部分化が発生したのである。

この分化の本質は、こうした階級闘争の戦場内拠点としての青年部を、その到達した水準の質を堅持して維持

していくのか、それとも、それを組合運動の拠点として組合主義的に維持するのか、をめぐる点にこそ存在していた。

従って、前衛五二―五五号の岩田派の大崎総括のように、「この時、反戦組合主義Ⅱ左翼組合主義との闘争が不徹底であった」として、左翼組合主義の単純否定Ⅱ組合解体路線として総括することは、デタラメである。

すなわち、この時の分化の問題を、「組合の活動か、行動委か」にあつたかの如くみることは、組合が、「組合か、行動委か」の単純二者択一の観念的な投影なのである。

このような方向は大崎以外の全通戦線に大崎における質の高い闘いに連帯していくような主体をついに形成することができなかったのはもちろん、七〇・一―二月における大崎内部の切り捨てになり、すべてそれ以降の闘いの総括が、民同、反戦派の裏切りとそれに対する目的意識的な闘いの不十分性―行動委の個々のメンバーの根性、自覚の不足―というきわめて不毛な総括の円環であった。

この大崎内部の内部分化を通して、前衛派結成時にそれへの結集を媒介として、生まれた弾圧粉砕行動委員会は、六八年秋における急速な再結集の母体となつていっ

た。

だが、それは、前衛派結成が、組織的継承性の曖昧性という点において問題をはらんでいたのと同様に、それまでの戦場内拠点をなした組合―青年部の行動委からの位地付けに關し、明確さを内含していたのである。

このことは、六九年中期に、戦場内拠点・青年部の位地付け、闘争委の位地付け等の組織問題に關し、厳密な検討を欠いたまま行動委を形式的に闘争委員会に横すべりさせるといふ事態に転化し、またそこから最終的には大崎闘争委の解体にもつながった、ということと無関係ではない。

第二段階の最終局面の東大闘争において、大崎の中心的指導部が逮捕されたことは、補足ながらその後の第三段階における、特に六九年秋以降の「岩田派」のセクト的な引き回しを許すことになった。

行動委運動のもとに、戦場内拠点を積極的に位地付け(行動委戦術と組合内反対派戦術の結合)、大崎闘争の第二段階において内含した不明確さを克服する機を欠いてしまったのである。

東大闘争以降、この東大闘争の敗北の総括を、岩田派は新左翼諸派の消極的防衛主義の責任であるとし、後に体系化された悪名高き「新左翼主要打撃論」への傾向を

深め、六九年一〇―十一月闘争の総括と称して、「労働組合・自治会の単純解体路線Ⅱ」―「行動委か組合か」。

「反乱かカンパニアか」にはいり、それを大衆に強制するという方針になったのである。そしてこのような方針の背景はいうまでもなく、当時(六七―六九年)の階級情勢の性格を工場反乱闘争の条件が成熟していると規定した上で「学園占拠、都市反乱から工場占拠闘争へ」という基本方針であった。これ等がまさに全面的に大崎において適用されたのである。その結果は、いうまでもなく全面的敗北と離職者の統出という最悪の解体となり、まさに総括する主体の消失という無残な終末をとげたのである。

我々のこの第三段階における総括は第一に大崎闘争委の精力的な闘いを前提とした上で、第二に「学園占拠、都市反乱から工場占拠闘争へ」という基本方針の問題をはっきりさせることであり、第三に第二の点を踏まえて問われていたのはいったい何だったのか、何が総括の中心問題であるのかを明らかにする事である。

岩田派は第二点の誤りを、その明白な破綻にもかかわらず認めず、それを前提にして第三点を「民同粉砕、反戦派粉砕―反戦組合主義の粉砕こそ問われていた核心的内容である」(前衛五五号)と総括している。二点目に

関する岩田派に対する批判はすでに「革命権力一号」で明らかになっているので、第三点目にしぼって述べてみたい。

周知のように、第三段階の最大の山場は六九年一〇・十一月の大崎行動委の具体的意識的な反乱闘争に対する処分攻撃をめぐる攻防戦であった。岩田派はこの攻防戦をめぐる総括において第一に「内部の解体情況のままで」この攻防戦が取り組まれたことを告白しているが、いったいこのような内部解体情況はいかなる原因によってもたらされたのか総括していかないのである。

第二に、この内部の解体情況の再構築に労学共闘が大きな力になったようにえがいてはいるが、全くのデタラメである。まさに学生部隊による代行的傾向が、大崎内部の主体的展開を曖昧にしたことを何ら総括していないのである。なぜなら離職者の続出という事実をまさにこのことの総括なしには語ることはできない。

この二つについては、つまるところ、大崎闘争委の主体的状況を無視した行動委運動の「理念」、しかも最後は、街頭決戦の空文句の理念の押しつけこそまさにその原因である。

第三に、以上の問題と切りはせせないが、行動委が職場大衆との関係で鋭くその方針を問われた決定的局面で

六、大崎闘争の教訓

以上、全連大崎における行動委運動の闘いをふりかえってきたが、この闘いからいかなる教訓を引き出すか、明らかである。

それは根本的には、観念的ソビエト運動の破綻・反戦組合主義主要打撃論の破綻―岩田路線の総破綻であり、それを労働戦線における党活動として克服する、ということである。

最近、半岩田派が大崎闘争の総括を「その戦術目標が明確でなかった」というような極めて中途半端な総括を

四、三多摩S製所における闘い

一、会社の性格

(一)企業内容……計算器機の下請で、(プレス専門。部品の製造、組立もしている)三多摩では大手企業に入り、経営内容は極めて優良。

(二)会社の実権は、社長がすべてを握り、一代のたたき上げであり、ワンマン経営である。気に入らぬといって

の、民同指導部への内在的対決の方針の欠如である。六九年一〇・一三闘争における介入戦術の視点の欠落。そして、一〇・一三闘争(六八年処分粉砕二周年南部集会。当局は集会禁止の部分ロックアウトをもって臨み、これに対する学生動員に権力を配置した)の翌日、全連地方官僚の「昨日から今日にかけての行動は、組合とは関係ない。処分されても面倒をみない」というスピーカー放送に対し、大衆が民同への怒りを爆発させた時、それを中途で打ち切ってしまったこと。そして、解雇発表時において、全力を挙げて職場内部にふみとどまって内部対決をつめるといふ姿勢を欠いたこと。また、基礎的には、青年部次元においてその反乱的闘いに連帯するような工作を放棄してきたこと。

すなわち岩田派の総括のように「反戦組合主義粉砕」が問われていたのではなく、この大崎行動委の反乱的闘いを革命的に保障するためには

- ①大崎行動委を主体とした内部方針の追求
- ②それとの関連における組合次元の闘いの位地付け
- ③①②に基づく、大崎行動委の質的強化と大崎職場大衆における闘争指導部としての確立、それを媒介とする全連南部への波及、これこそが問われていたのである。

出したが、岩田式ソビエト運動(経済「学」主義的、形式主義の「論理」ソビエト運動)論の破綻をまざまざと確認することなく一歩も前進しなす。

さらに、権力闘争の側面であるソビエト運動の一面的強調と、「対権力闘争」の切り捨ての誤りを総括しなければならぬであろう。

我々は、工場・職場闘争を、拠点根拠地運動として位地付ける。そして、人民の軍隊・革命戦争の根拠地を闘いとるものとして、現代ソビエト運動を位地付ける。その中で、大崎闘争の教訓を生かし切るであろう。

部長連を首にし、社長の下は課長しかいない、ということからもいえる。

(三)社長は同族、直系を優遇し、長年の功労者には何らの恩恵も与えていない。

(四)会社の親会社は、いづれの資本もきわめて労働者に対して敵対的であり、反動的経営者である。

(五)今まで、三回組合を作る動きがあったが、すべて弾圧

され、多くの犠牲者を出してきたことから明らかに
様に、労働組合は絶対認めない反動的経営者である。

○年末一時金闘争

①憲法、労働法を守れ！

②組合事務所を設置せよ！

③時間内組合活動を認め！

○の基本的要求については(①を除き)棚上げしたま
まで、ストライキも打たずに終る。しかし、「団結」
の確認という成果を得た。

○以降、権利問題で団交を重ねる。

①団交の日どり設定は毎回会社に譲歩。

②社長は一度として出席したことをなし。

③権限を持たぬ課長との団交で話にならない。

○組合(分会)結成以後の会社の動き

①工場内部から外部への直通電話を切断。

②守衛所を設置し、組合員の動きを監視。

③人事移動を行ない労務管理強化。

④時間内組合活動に対する合法的な賃金差別Ⅱ分会執
行部は月額一万五千〜七千円の減収。

⑤御用組合になれば会社外に組合事務所を設置する旨
の見解を出す。

三、今闘争の発端と経過

(七)シングルでは「製造」と「組立て」とに部門が大別され
ており、建て物が分かれている。「製造」の建て物に
は、「治工具」と「プレス」の二職場に分れ、「プレ
ス」は四つの班に分れている。「治工具」では、製
作所、Y精機ら親企業注文のプレス金型を作り、その
金型で「プレス」により部品を製造する。そしてその
部品を親企業におさめている。金型は主として精機の
注文が占めている。この「製造」部門での月額売上げ
は約千三百五十万円。一方、「組立て」部門は五つの
職場・班に分れ、○の卓上計算器などの組立てを
行ない、半製品を○に流してあり、まさに○のライン
の一環としてある。ここでは、月額売上げ八百万ほど。

二、分会結成と今闘争に至るまでの経過

○一九七一年・一一・一五 統一労組(合同労組)の分会
として結成

組合員約一二〇名(男対女三対七。パート約四〇
名) 非組合員二〇名 執行体制一八名

一九七二年・一・二六(水) 団交決裂

○社長出席予定の団交だったが社長が私用ですっぽか
す。

○分会執行部は課長に対し、「おまえ等うすらバカじ
ゃ話にならない。帰る」「帰ろ帰ろ」と退席。

一・二七(木)

○昼休み集会を時間内に喰い込ませての強行半日スト。

○課長との団交Ⅱ団交委員を五人にし、「団交ルール
を決める団交」なら社長が出席する旨、会社側表明。

○会社側、プレスの金型や、製品の持ち出しを計る。
(一部はやられたが他大部分は阻止)

これにより執行部泊り込みに入る(以降二・二まで
連日貫徹)。

一・二八(金) 二四時間スト前日の夜八時に執行部
決定。

○何も知らない組合員は正常に出勤。

○会社側(幹部・非組)は誰一人として来ず。

○賃金不払いに対し、「社長をつかまえてこい！」と
代表を選び、社長宅へ急行させる。

↓社長一家逃亡のあと。

○一・二九と、それ以降の戦術をめぐり分会執行委員
会激論(本部対分会)。

○のち、三ブロックに分れ職討しそして一票投票(参
考とするための)。。。スト賛成約三五名、反対一五
名、執行部へ一任約三〇名

○結局、会社は今週一杯ストをやらせるつもりである
うということ。「肩すかしをくわせる」戦術を本部
が押し切る。

○Y精機等親企業ストライキに介入。金型等を返せ！
と組合に圧力をかける。

○夜、泊り込み組に対し、一般組合員(奥さん層)、
ダンナさんも引っぱり出しての差し入れの激励のあ
いさつに顔出し。

一・二九(土)

○賃金は払われた。会社側は給料計算の事務員のみ出
社させた。

○次(左記)の情報を入手したと、我々の切り札
となる金型等を押えつつづけるため二四時間ストを続
行。

△会社弁護士と組合側山花貞夫弁護士との会見によっ
て明らかとなったこと

一・二六団交での一分会執行委員の暴言、つづい
ての一・二七半日ストに社長は立腹し、精神異常的
状態にあるとのこと。断乎組合をつぶす気である事。

○この日も会社側、だれひとりとして来ず。
一・三〇(日) 二四時間スト続行。
○金型搬出は日曜日をねらってくるだろうとみて、特に嚴重に警戒。

一・三一(月)

○会社側昨夜、不当労働行為を犯してまで二組を結成。
○組合、早朝ピラマキ(隣接のC計算機工場、F自動車工場を対象)。
○組合、会社のロックアウトを予知し、また会社側は出勤してこないものとみて、就労戦術に切り換える。(ロックアウトの口実を与えないためと、賃金請求権を獲得するため)

朝、組合員の出勤時、旗を降ろし、門を開き、入った時点で門を閉め、旗をたてた。親企業幹部の「抗議」「おどし」の来社に対しては一步も引かなかった。(一事実上のストライキ)

○一般組合員(奥さん層)自発的、組織的に、泊り込み組の食事の保障体制築く(差し入れという個人負担から↓めしたき、集団でのせわやき体制確立)。
○会社、C製作所、Y精機の親企業二社に対し、金型等の工場内立入り持ち出し許可の承諾書を出す。

とが起る。会社より「解決。二日出社されたし」の電報を受けた組合員からの問い合せがひんばつ。説明を聞き退職する旨の返事をした者が出る、それは積極的組合員だった。
○早朝執行委員会(A M六時三〇分)

一般組合員から「収拾案提起」のピラマキ許可願を出す。

内容I本部委員長の收拾のとりきめを知らずに作ったピラマキだったが、その内容は委員長のとったことと大体同じ(案)だった。↓本部執行部大喜びで高く評価。

以下、執行委員会の内容については不在のためわからず。

○出勤↓早朝集会
本部、ペテン的に乗り切る。勝利!勝利!を終始強調。

○以降本部は会社に対し守勢の立場で弱腰な方針、対応しかとらず。分会執行部と対立ひんばつ。

▲注▼二月一日夜半の執行委員会

二月一日夜半の執行委員会。執行委員会は異例の形式で行なわれた。オルグが議長をつとめ、本部委員長がトップ会議の内容報告と收拾にあたる上での所感を述べ、

○C製作所、Y精機よりの最後通告(「仮処分↓強制執行」のおどかし)、他社からの圧力も頂点に。↓組合II引き延ばしに努める。

二・一(火)

○夜半(午前)、会社が組合員ひとりひとりに二・一臨時休業にする旨の電報を打つ。
○朝、組合員(半数)は出てきた。

○会社側が個別訪問による二組への囲い込みを始めたという情報が入り、組合でも午後班編成をし、来ない部分へのオルグに飛ぶ。

○製品の一部を引き渡した上でトップ会議:このような背景のもとで、C、Y、S等親企業の首脳を入れ、会社弁護士、社長に対し、統一労組本部委員長(三労事務局長、立川地区労議長)が単独で会談するという正にトップ会議が実現された。

○徹夜の分会執行委員会(A M二時)▲注I▼
*権利問題は棚上げのまま、明日からの就労をトップ会議は決めた。

・分会執行部II「敗北」の確認と自己批判、そして分会再建の決意。本部不信が積もる。

・本部II敗北を認めず勝利であることを強調。
二・二(水)夜半(A M三時四五分) 恐れていたこ

それに対し分会長が質問する。分会執行委員は血の気の多い面々だったが、皆うつむいたまま動かなかった。

まずはオルグのあいさつと、次いで本部委員長の報告と所感が、補充しあうという形でそれぞれ述べられた。それ等一緒にした要旨を次に記しておく。

●●●朝から就労したい。権利問題については今後当分の間、社長が正気になるまでカシオや会社の弁護士を通じて本部が間接的に社長と接渉することになった。だが皆さん!我々は敗けたのだろうか? 勝ったのです! 結末は強化されたではないか。形はどうであれ、社長を交渉の場にひきずり出すことに成功した。組合を認めなければ会社はやっていけないんだということを社長にわからせることができたと思う。会談では、目が坐ったまま無表情だった。カシオ等は我々に味方し、社長を戒めてくれた。●●●二組をつくられたことは申訳ありません。だがしかし、二組は力をつけてない。朝になったら見ていたまえ、職制等は小さくなって出社して来るにちがいない。

そしてこれに対し分会長は質問という形で、どこが勝利なのだ!と本部を批判した。そして情勢分析の甘さとトップ会議II本部委員長の経験と手腕に期待しすぎたことを自己批判し、「組合員に何とていいのかわから

ない。わびようがない」と思わず声を殺して泣き伏した。
……空白の時間が流れた。突然、副分会長が口を開いた。「くやしさが、就労しよう。分会長を立てて分會を作りなせう！二組の職制は署名を集めて首にしてやろう！」と。ついで書記長が泣くのをこらえながら「せうだやり直せう！な、やろう！」と呼びかけた。分會執行部は敗北を認めた。そして再建しようと決意した。それ故、敗北を認めず勝利だ勝利だ、という本部に腹が立っていた。

分会長の「権利問題を糊上げにしての就労と二組というコブに対して、我々は何を獲得したのか！」という本部見解に対する反論への本部の回答は、前述のくりかえしをするだけであった。そして、「まだ闘いは終わったわけではない。これから闘いである。就労するが、二組と一緒に就労するわけで、我々は意識的に闘争体制を堅持し、闘わなければならぬ」と。これに対し分会長の「具体的にはどうするのか？旗は？ハチマキは？」という問いつめに對し、本部は何ら回答できず、それに腹を立ててか一執行委員は顔をあげ、「旗はおれ達の象徴だ！降るせるか！ハチマキもそうだ！執行部だけでもストを続行し職場を監視すべきだ！」と叫んだ……

四、闘争の経過 (続)

二月二日以降の闘いの基本軸は倒産のドーカツに対してどう闘うのか、であった。

(I)

○一月二七日以来の反乱的な闘いが二月一日の三多摩統一労組本部委員長のトップ会談による收拾によって、闘争は新たな困難をむかえた。

○会社側は、二月一日のトップ会談での組合員の敗北感をとらえ、もうれつな切り崩しの攻撃をかけてきたのである。

○職制は積極的に家庭訪問、電話、と、仕事中に切り崩しを行ってきた。応じない者へは仕事を取り上げたり、ケチをつけたり等のいやがらせを行ってきた。その内容は「組合は暴力組織であり、会社をつぶそうとされている」であった。

○組合側は連日に渡るピラ入れや集会、家庭訪問等の諸活動によってこれらの会社の策動をバクロし、あるいは仕事上における差別をした不良職制に対するつるし上げと会社に対する抗議行動を組織してきた。

○しかし、一方統一労組本部は何かとトップ交渉路線で收拾を図ろうとしたのである。

○そのよりななかで、二月一日に続いて二回目のトップ交渉が二月一日に開かれたが、何らの成果も得られずに終わった。

○そして二月一日、会社側は、二月一日のトップ交渉に対する組合員の本部に対する不満をとらえ、非公然の脱退工作によって獲得していた一人名の脱退届を公然と出させ、一きよに組合破壊に乗り出してきた。

○当日、本部と分會三役との合同会議が開かれた。本部委員長から一六日に親企業とのボス交が予定されていることが明らかにされ、この会談によって親企業の保証を取りつけ、会社と再度のトップ交渉による收拾を提起してきた。▲注1▼

しかし同時にそれに対し分會側からトップ交渉に対する不満が強く出された。

○こうした中で、親企業は一五日になって「切り札」のドーカツをかけてきた。すなわち二月分の仕事の打ち切り通告を行ってきたのである。会社はこの「仕事の打ち切り」は「組合の責任である」とし「このままだと会社は倒産だ、会社をつぶさないためには、〇に對し一人一人が誓約書を出す以外ない」という方針を職制のインシアで職場会議を開かせ、署名をさせようとした。きた。

○会社側の切り札は倒産のドーカツは組合員に大きな動揺を与え、一部組合員は誓約書に署名してしまった。

しかし拠点職場においては逆にそのギマン性を暴露し、粉砕し、さらに一度もそのような方向に傾いた組合員を奪還するため、全体集会を開き体制を建てなおした。

▲注2▼

○このようなかで開かれた親企業と委員長とのボス交渉において、〇は仕事を〇に出す条件として「〇に對し全面的に協力し、納期の遅延及び物品等の搬入・搬入等については一切妨害させず、御迷惑をかけません」という誓約書に社長・委員長が署名することとした。

○本部は組合主義的に收拾するため、これを受け入れた。当然分會側から強い不満が続出した。

しかし、会社側は会社側をとりこえて〇と委員長のボス交が行なわれ、組合の組織が後退した姿でも存在することを恐れ、〇・委員長会談の結果を無視しようとした。

○すなわち、翌日(二月一七日)朝、社長が先頭に立てて全従業員を集め、「倒産」の危機を訴え、企業意識をくすぐり、そして「本部委員長ではなく、分會三役の署名が必要である」というデマ宣伝によって、一挙

に組合破壊を行おうとした。しかしあまりにも見えすいたデマのため、残った組合員には逆効果になり、会社の意図は失敗した。

○その結果は誓約書に委員長が署名するかわりに、二月二一日に団交予備会議を開き、それには会社は「誠心誠意話し合いに応じます」ということによって収拾された。▲注4▼

(II)

(イ)これ以降の展開は、会社側も短期的に組合を破壊することができなかつたし、組合側も会社側の攻撃をかわらうじてかわしたという関係上、持久戦になった。

(ロ)すなわち会社側は、会社側内部において分裂が発生した。日常的に組合側のつるし上げの攻撃にさらされてきた主要な課長三人がハト派に転換し、組合と話し合うべきだという方向になりつつあり、社長は孤立化しつつあった。そのため班長クラス、班長補佐クラスで、組合切り崩し攻撃の最前戦で活動した部分はマヒしてしまつた。そのため第二組合結成ができず、また切り崩し攻撃もできず、散発的ないやがらせ程度しか会社側はできなかつた。一方組合側も四〇名近くが脱退し、具体的な要求を何も会社側から引き出すことが

できず、すっきりしなかつた。
(ハ)そのようなかで開かれたトップ会議はなんの進展もなく終つた。

(ニ)それ以降、双方決め手を持たぬままずる一週間経過した。というのは本部委員長は動き出したら非和解的な関係にある以上、組合主義的な収拾は不可能になると判断し、曖昧な休戦を長びかせ、春闘の経済的要求闘争でなんらかの収拾を計る方針であつたからに他ならない。▲注5▼

(ホ)しかし、分会側の不満は極めて高まり、そのような曖昧を引きのばしを納得せず、行動することを要求した。そこで本部は都労委の斡旋申請の方針を打ち出し引きのばしを計つた。本部はその行動がエスカレートすることを恐れ淡つたが、本部も認めざるを得なかつた。

(ヘ)すなわち、連日、分会三役、時には執行部全員が午後九時の就業時二・三分前に団交申し入れという名目でハト派の課長を呼び出し、そのまま就業時間に喰ひ込む抗議行動を展開していったのである。さらにゲリラ的に仕事中に散発的にこの抗議行動をハト派課長にかけていった。

(ト)この行動は極めて有効な戦術となり、会社は弾圧のキメ手を見い出せないまま追いこまれた。▲注6▼

すなわち、一種の心理戦となり、会社を精神的に追いこむことに成功した。そして会社はついに社長の出席する団交を約束せざるを得なくなり、三月一八日に団交が再開され、組合の要求の一部を認めてきた。

(イ)以上おまかかな経過である。従来の下請企業における闘いが、親企業からの倒産ドーカツには極めて弱く、屈服させられるか、粉砕されるかであつた。

(ロ)しかし、闘争の闘いの意義は、本部執行部のトップ交渉によって一端屈服に近い関係に追い込められながらも、そこから直ちに、下部分会のヘゲモニーで攻撃に出たところにある。民同の犯罪性はこれをトップ交渉というボス交路線Ⅱ(大衆にはこの屈服の事実をおおいかくし、「勝利だ勝利だ」ということで何とかこまかし、組合を維持させ、これをボス交の圧力につかつていく)Ⅱという全く闘う主体を手段化したところにある。それに対し、大衆自身がトップ交渉という疎外された路線を突破して破綻させ、自らの闘いにおいて攻撃を行ったことである。

▲注1▼

親企業が統一労組委員長とのボス交に応じた背景は、〇のラインとSが直結しており、Sの闘いが突発的であ

つたため、〇にとって十分体制がとれておらず、直ちに統一労組と対決した場合、〇自身の出血も多くなり、体制固めのための引きのばしとして彼らにも必要であつたのだ。

▲注2▼

この攻撃によって、先に脱退した者も含め四〇名が脱退した。残った組合員は約七〇名であつた。非組は組合結成当初からはいらなかつた者も含めると約七〇名であり、全従業員の半数になつていった。

▲注3▼

会社側はトップ交渉の中で、本部委員長が生産に協力するといつても、分会員は不満がますます高まっているため、欠勤、サボタージュ等によって生産が現実の上つておらず、本部委員長の約束をとりつけても意味がないという判断をしていたのである。

▲注4▼

団交予備会議は社長と委員長のトップ会議の事である。

▲注5▼

前からそうであつたのだが、社長がきちがいじみてゐるため当事者能力がない。従つて時間をかけて冷静にもどらせ、正常にもどさなければだめだ。ということであることを組合員に納得させてきた。

△注6▽

というのは、会社が押してくれば後退し、会社がだまっていればねばるといふ行動であったからに他ならない。

△総括▽

(一)今闘争の概要

今闘争は権利問題から端を発した自然発生的な反乱であった。これに対し、協会派闘争指導部は、組合的に集約しようとし終始それを抑制した。だがしかし、それではみ出した大衆のエネルギーは、一方で会社が一貫して行ってきた組織破壊攻撃の策動をその都度ことごとく粉碎した。そして、分会執行部の行動委員会的けん引から、組合員の大半を占める婦人労働者・パートのおくさん層がそれを乗り越えてハッパをかけるに至った今闘争は、「資本との力関係の基本的決着を問う性格」の闘争へと発展したが、「親企業からの発注取り消し↓倒産」の恐怖の前に優勢のまま屈せざるをえなかった。

「もはや闘争は組織防衛の闘争へと移っており、職場と組織を守れたのだ、我々の力で就労を再開したのだ、権利問題はトップ交渉で詰めてゆく、だから勝利だ」と、ベテンのに収拾した指導部に対し、なおも分会執行部は

失敗も八〇%「やれるだけやってみるんだ、とめだてするとぶっとばすぞ」という心情、信条。

○分会執行部メンバーの仕事柄持っている職人的気質。

○婦人層(パートの主婦層)のエネルギー

1、家計に直接にはびかぬ補助労働であるという気楽さ。

2、それ以上に、パートという形で日常的抑圧の蓄積にひめられた無意識の力。「敗けるぐらいなら道づれにしてやる」「どうせやめるつもりでいたところだ」

(二)二月二日の敗北を許した原因

1、孤立した闘いであったこと。今分会の闘いには、地区労はじめ数多くの単組が支援した。しかし、組合の支持共闘関係は、幹部間の形式的、義理程度のものでしかなかった。

(例)Sのとなりにある富士自動車工場は、全金加盟であり、S分会に対してはあいさつにきたり、旗をかしてくるなどした。しかしながら、そこへ早朝ピラまきをした際、大半の労働者はピラの受け取りを拒否した。

2、そして今闘争が、二月二日の敗北を許した決定的原

じめ組合員大衆の反乱的エネルギーはもえだぎっている。そして、今や、その彼らの中に、我々の存在が定着しつつあることも事実となっている。

二月二日をもって一応の收拾はついたものの、なお流動的な状況はガンとしてあり、さらに複雑に発展していくであろうことは確かなものである。

さて、この二月二日までの今闘争において、特筆すべき点をあげてみよう。それは、各親企業のプレス金型他主力親企業 ○ 計算機のラインの一部にあたる組立部門の半製品の制圧(一億円相当) △注4▽と、そのための連日の泊り込み貫徹。そして、分会組合員の大半を占める婦人労働者・パートのおくさん層等による自発的組織的めしたき体制の確立による泊り込み組並びに闘争自体の体制保障。そしてしかも、これらその主役は、階級闘争を知らぬ組織されたばかりの労働者であったことである。……今闘争は、まさに、反乱の大衆工場占拠ストライキ闘争であった。……

今闘争は、組合でも反乱的闘いはできうることを示した。

(二)闘争の原動力

○「知らない」↓こわさを知らない。「成功も八〇%、

因は、「親企業の発注取り消し↓倒産」の恐怖に屈するよりほかになかったことにある。この恐怖は、下請け中小企業に共通の克服しがたい最大の壁である。……それを克服するには、親企業労働者の連帯と、ブルジョアの側面の組合秩序を乗り越えた目的意識的闘争主体を要する。

△後記▽

歴史に記されることもないだろう小さな闘いだったが、現情勢下にあつては、密度のこい重みのある闘いであり、その教訓は、日本階級闘争の前進に大きく貢献するものと信じる。そしてそれを生かすのは、我々自身であらねばならぬ。

(村山 知久)

岩田派の破産と中間派の再屈服

小山 理

我々は、一年有余にわたる岩田理論―路線との自己切開、そこからの内在的止揚を基礎として『前衛・労働者革命委員会』を結成し、その政治的、組織的体現として機関紙『革命権力―創刊号』を発刊した。

『革命権力』の真隨は、戦略的には「工場占拠・人民の軍隊・革命の戦争」路線的には「対権力闘争とソビエト運動の二者択一を止揚せよ」にある。まさにこのことは、日本階級闘争の総括と世界階級闘争の提起している諸問題から教訓化しみちびきだした普遍的結論である。しかも、日本の秋の階級闘争で現出した左翼戦線の分裂と混乱状態は、我々に、その意義と重要性を告げ知らせている。

我々は、我々の理論的成果をふまえて、それをテコとしながら原則的活動の推進をもって現実の階級闘争の要

求している諸問題に真正面から回答していく必要があるだろう。

そうした一つの課題として、前衛岩田―半岩田派との分派闘争推進の問題がある。それは、『革命権力―創刊号』―我々の再出発に際して―でものべているように「……日本の多くの革命的労働者、学生にとっては特殊ではあるが、然し我々自身にとっては根本的な作業としてある」からである。

この小論は、そういうものとして提出するものである。

(一) 岩田路線の破綻

一、岩田路線の破綻は、いまや周知の事実となっている、

たとえどのようなりつくりをやるうとも破綻は破綻でしかない。我々は、冷厳にそうした岩田路線の破綻を指適しておかねばならぬ。何故なら、我々は、岩田路線の破綻に気がつきつつも、いわゆる「原則綱領」普遍性をもってしているのは我々だけ」という普遍性に名をかいだ独善的態度やかたちだけの自己批判の自己批判に、妥協し屈服している中間派の諸君がいることを知っているからである。こうした中間派の妥協と屈服は、階級闘争全体へのそれではなく、学的体系主義へのひざまづきといつてよい。

さて、我々は、そうした岩田派内部における流動をとらえるために、岩田路線の破綻を基本的に確認しておく。

岩田路線の破綻は、次の三つに要約することができる。
(1) 安保決戦の敗北——学園闘争の敗北、従って「学園闘争から工場占拠闘争へ」

(2) 新左翼への敗北——新左翼主要打撃路線

(3) 組合の単純否定——解体路線、これである。

こうした岩田路線の二者択一とその絶対化は次のような問題性をはらんでいた。

それは第一に(1)に見られるように、工場占拠闘争への単純のりうつりと、その直接性において学園闘争をきり

ずてていること、いいかえれば学園闘争を単純に労働運動へ従属させる構造となり、現実的には、学生運動の単純もちこみ——維持策となつていていること。

第二に、新左翼主要打撃論である、このことは、まさに日本における主体的条件——歴史的条件を度外視した、きわめて単純な解体路線でしかなく、権力闘争の原則的基準を欠落させた、歪シヨウな内ゲバ主義であるといつてよい。このことに多言を要しない、まさに新左翼こそ権力闘争を担う中核として——武装勢力の中核として止揚していかねばならないからである。

第三に、組合の単純否定、あるいは戦闘的組合運動の解体路線である。これは全くもって多言を要しない。いったい、我々が職場で闘争を組織するとき、敵として横たわっている「組合的意識」を無視して、あるいは、単純否定してやりえただろうか。

あきらかに否である。
現場の諸条件にそくして、このきわめて原初的かつ普遍的作業をもって組織したのではなかったのか。これこそ階級形成の視点である。

かくして、単純否定による岩田派の解体路線は、そうした視点の欠落を必然化し、内部のかかわりでなくきわめて外部的なかわりとならざるをえないのである。

ことは、常に具体的にあらねばならず、現象から出発しなればならないのである。

以上のような岩田派の路線は、更に「仏五月革命」の総括を更に手前勝手におこない理論化されるわけだが、我々の仏五月革命の総括は「革命権力」創刊号を参照されたし——その行きつまりと組織的解体状況を結果するのである。

まさに、組織解体状況は、何よりも路線上の破綻の結果であるとしてよい。このことの深核な総括を回避しては、いかなる総括も無意味である。

『真摯な総括、仮借のない総括』とは、まずもってそこから始めるべきである。

(二) 岩田路線を前提とした中間派の修正主義的党内闘争の限界

一、岩田路線は、ゆきつまり総破綻し、そしてその結果として半岩田派の修正主義的運動がおこっている。

我々は、それを第一に、前衛五十九号論文——(北西部における行動委運動)——第二に、同六十号論文——(全通闘争総括)——にみとることができるとする。

まず第一の五十九号論文——(略)——の主要内容を確約し

てみよう。

五十九号論文——(略)——は次のような基本的内容をのべている。

それは、(1) 内部階級闘争は具体的に、(2) 新左翼の結集、(3) 機関紙、誌の自立、(4) 国内、国際階級闘争の総括と教訓の吸収、である。

こうした内容は、岩田路線に切迫していく内容性を、部分的にははらんでいる、といつてよい。何故なら、(1) は、新左翼主要打撃路線に迫るものであり、(2) は、内部階級闘争は、権力と同じように闘かわねばならないとしながらも、その具体性に接近し、(3) において、自立的結合を行動委への解消をしつつのべており、とりわけ(4) においては、国内、国際階級闘争の総括と教訓の吸収の必要性を強調しているからである。

このことは、非常に重要ないみをもっている。何故ならそれは、戦略、路線を確定していくという革命性を内にはらんでいるからである。

だからこのことは、また、岩田路線の経済学的体系による教条化に対して、革命の実践からまなびとった革命の実践にふさわしい、戦略、路線を確定していく、といふことの第一歩であることをいみしている。五十九号論文は、そうした意義——部分的にせよ——を有していたとい

ってよいであろう。

x x x

五十九号論文の内容が、いかに、そうした意義から後退し個別革命主義としていくかはのちにのべるとして、ここで簡単に六十号論文(略)にふれておこう。

二、六十号論文それ自体、我々が目をむけるような内容性をもちあわせていない。

何故なら、(1)内部の主体を無視した方針をやり、(2)それが政治的、組織的解体し破綻したことを、(3)路線上の破綻として総括しこのことが根本問題であるしえず、むしろ回避しつつ部分的自己批判、あるいは、部分的総括でとりつくろいながら、総括しているからである。

従って、この論文の基本的性格は、(1)岩田路線を前提とし、(2)『都市反乱↓職場反乱の具体的集約の欠如、外からの戦術的指導であった』等にみられるように部分的総括し修正、(3)総括の中心問題を個人の責任問題へとスリカエルことによって、(4)中間派の半岩田的性格を明確にさせたことである。

だが、真の総括とは、そうした部分的修正、個人へのスリカエにあるのではない。

何よりも、路線上の問題として全面的検討の徹底化と内在化することにあるのであり、それを組織全体のもの

として血肉化することにあるのである。

(三) 岩田派の対応

こうした中間派の修正に対して岩田派は、どのように対応しているのか。

それは、福原論文し機関紙の任務は何かに体现されている。我々は、彼の論文とその行間から次のような問題をくみとることができる。

第一にそれは、中間派の修正を中和吸収しようとして

第二に、自己の理論し路線の保身と問われている問題をウヤムヤ化していることである。

論文の中にたくみに押入している、くだり、すなわち『財政を保証している献身的革命家、シンクタンク、を忘れるな』『各行動委の下からの運動の提唱』は、それをするべく示している。そこにあるのはまさに、献身的の押売と理論の優位性は、自分だけにあるという居直りだけでしかない。

だが、真の革命家の自立的結合は、そうした押売りの強要と理論の優位性というマヤカシの中に存在するものではない。まさしく、革命家の無限の自発性にあるので

あって、そしてその前提条件とは、理論的教条し学的体系から解放されることを基礎として、現存する階級闘争に主体的にかかわり、総括し階級闘争のつきあたってはるカベを打開して行くことにあるのである。従ってそこでは、組織に対するかかわり方、外在性などは一切存在しないことは自明のことである。

けれど、岩田派にとっては、自明のことではない。

『世界革命し三号山川論文』は、それを明確にしているからである。

(四) 世界革命三号山川論文の性格と

役割

『世界革命し三号』『党機関紙の任務は何か』は、機関紙活動の革命的再編のためにしという副題で、結成以降の総括をおこなっている。ここでは、詳細にわたっての批判的言及は省くこととしよう。何故なら、あまりにも、エセ自己批判的総括でしかないからである。

それ故ここでは、次の諸点をおさえておけばよいであろう。

第一に「前衛編集委し宣伝の党から党の実体をつくり出す」としていること。

まさに、これこそ、党を抽象化させる、従って解党主

義である。このことの説明に多言を要しない。「前衛編集委」こそ実体なのであって、そもそも、党を名のっていないからである。もっとも、党は名のれば党であるということには絶対なりえない、ということには至極当然のことである。

第二に、党主体の自己総括、相互点検をかけた、没主体的紙面と外在的編集委、としていること。

いったい、山川某なる筆者は、政治組織を何と心得ているのだろうか。およそ、政治組織にあってはならないかかわりの外在性などと山川某自身が、外在的なかかわり方をしながら云っているからである。

しかも、「相互点検云々」などと一大発見したかのごとくいつている様は、まさに、自分が火をつけておいて「どうして燃えているんでしょね」とやきだされた人に聞いているのにひとしいではないか。

そもそも、当時の論争の中心問題は、第一に、四十号し福原論文によって現出した問題、すなわち、我々の組織的継承性の問題であり、第二に、六十年ブント以降形成されてきた、「新左翼」に対する評価と我々のかかわり方であり、第三に、反乱がカンパニアかというかたちで路線をめぐって存在していたのである。

そして、その深化と教訓の豊富化するために、六七

六九年に至る日本階級闘争―世界階級闘争の全面的総括の開始と、我々自身の実践的主体的総括が要求されており、これにこたえることによって、戦略・路線をめぐり論争へと発展させることだったのである。

だが、岩田派は、まさに、そうした本質問題へと切迫しえず、岩田派の「二重の敗北論」という主観的総括とそこからみちびき出した「新左翼主要打撃路線」をもって、そしてそれを自己正当化するために、ことごとく「きりすての論理」をもって、真に問われている総括をアイマイにし回避したのである。

そして、そうした岩田派の策動に対し、中間派の諸君は、安易に連帯し、かつ、そのような没主体的連帯性をもって、最前線で闘かっている部分に背後からおそいかかるというゆるしがたい役割を果したのであった。

従って、総括を総括たらしめるためには、四十号論文によって現出した論争の中心問題―すなわち、(1)日本階級闘争における我々の位置、(2)組織的継承性、(3)新左翼の評価と位置づけ、(4)戦略、路線の明確化―を確定するということであり、そのことをアイマイにし回避した、かたちだけの自己批判、部分的総括は、単なる安売りではなく、本質問題をアイマイにさせ糊上している、というところに結論づけられる。

こうして、(1)、(2)において五九号論文は、戦略、路線をめぐり検討に部分的に接近したのであるが、六一号論文(一一三)においては、岩田路線の内容でしめくくっているのである。

まさに論争の中心問題を回避し表皮の問題を本質問題のように総括しているが故に、岩田路線Ⅱ『世界革命―三号』山川論文に包せつされ屈服せざるを得ないのである。

六一号論文の内容は、それを証明している。
六一号論文の基本的内容は、次のように要約することができる。

(1) 組合運動の傾向を多分に残存させていたから致命的限界であった。
(2) 従って、権力闘争組織としての自覚をもった行動委の建設

(3) 行動綱領―「職制追放、労働者権力樹立」は、「職場占拠から二重権力・蜂起」の方法である。

まさに、六一号論文は、五九号において展開した内容からは、はるかに岩田路線へと屈折しているのである。なぜなら、以上の基本的内容からわかるように、第一に、依然として歴史的運動と主体的条件の生成過程を単純にきりすてていること。

くりかえし強調しておけば、我々の実践的総括をふまえ、戦略、路線にかかわる根本問題への具体的切開と明確なしには、どのような形だけの自己批判的総括を連発したにせよ、それは、単にとりつくり表的表皮の問題を、ぼじくっているにすぎない、ということである。「世界革命―三号」山川論文は、そうした本質問題に主体的にかかわるといふ内容を有していない。あるのは、形だけの自己批判―口先だけの自己批判でお茶をにごし、中間派を必死になってひきつけようとして、いることである。

山川某論文は、そのようなものとして、存在しているとみてよいだろう。

(五) 依然論争の中心問題を回避している中間派

さて我々は、五九号論文―(北西部における行動委運動)―の結論がどのように後退していくか、以上のべてきたことを念頭におきながらみてみることにしよう。

その前に、五九号論文の基本的内容をいま一度確認しておこう。

それは、(1)内部階級闘争は具体的に、(2)国内国際階級闘争の総括と教訓の吸収、である。

第二に、「権力闘争組織としての自覚をもった行動委」として、そこから行動委運動革命におちいっていること。従って又解党主義になっている。

第三に、(3)にみられるように個別工場占拠革命主義になっていること。

第四に、権力闘争の核心問題を欠落させた「二重権力論」になっていることであり、従って経済主義におちいっていること、であるからである。

このことは、『革命権力―創刊号』において―先進国・日本革命の戦略問題―にかかわって提起しているわけであるが、六一号論文は、まさに、「自衛の武装と革命の武装の質的ちがひ、そこから発展するプロレタリアの「独自の軍隊の形成」について、全く無自覚なのである。行動委運動―ソビエト運動は、半公然・公然活動という性格をもたざるを得ないのであって、従って、そうした活動とは、相対的に独自な非公然組織―軍事組織が要求されるのである。

だから、単に「権力闘争組織としての自覚―行動委とすることは、自覚性一般であって、革命の根本問題にはなりえない、というだけではなく、武装の抽象性を付与した、行動委運動の自動成長論である、ということをしみしている。

なぜ、個別革命主義—経済主義なのか。

岩田路線は、次のように絶対化—最近、主要などと接木しているが—していく傾向がある、すなわち、「生産過程こそは……」↓経済主義的把握、これである。これをもって、一局面へとはめこみ、そこから個別工場闘争を体系化し絶対化していくのである。↓個別革命主義だが、革命とは、まさに、相敵対するブルジョア国家権力をセンメツするものとして「人民の軍隊」の形成なくしては不可能なのである。

従って「工場占拠、二重権力、蜂起」という戦略問題を、そうした革命の根本問題にかかわって克服、止揚されねばならないのである。

なによりも、我々の実践的総括は、そうした本質問題へと結論づけられなければならないのではなないのか。拠点における、政治的、組織的解体状況は、そうした総括を欠落した岩田路線の破綻の反映であるということこそを総括すべきであろう。

(六) 小論のむすび

我々は、以上のべてきたことから、岩田派の現状を次のようにみてとることができる。

それは第一に岩田路線が破綻への転落を現出していること。

第二に、そうした岩田路線の破綻に対して、岩田路線の根本的検討をぬきにした修正派、半岩田派が存在していること。

第三に、四十号論文によって現出した論争の中心問題と組織問題が棚上げされ、アイマイにされていることである。

我々は、まえにのべたように「我々の再出発—前衛・労働者革命委員会の結成の政治的組織的基準を、岩田路線（理論）の全面的切開と止揚という、日本の多くの労働者学生にとっては特殊であるが、然し我々自身にとっては、根本的作業をとうして生み出してきた」—「革命権力—創刊号」

それは、また、我々の眼前で進行している、日本—世界階級闘争の全面的総括とそこからの教訓化と血肉化が、何よりも、なさなければならぬ我々の作業としてつきつけられたのであった。

こうした作業の集中的、政治的、組織的体现として我々は、

A、革命の根拠地・人民の軍隊・革命の戦争！

B、ソビエト運動と対権力闘争の二者択一の路線を止揚せよ！

C、共産主義左翼戦線の分裂と混迷を止揚せよ！
の戦略、路線をかかげた。

いまや我々は、その貫遂を革命の利益にかけてあらゆる努力を傾注しなければならないだろう。

同時に、岩田・川上を階級戦線から放逐し中間派の修正主義を根底から批判する新たな段階へと入らなければならぬ。

—追記—

この小論は、昨年十二月下旬に書いたものである。その点を念頭においていただきたい。

(小山 理)

レーニンとロシア革命の軍事問題

「パルチザン戦争」について

水沢史郎

我々が、レーニンの『パルチザン戦争』（一九〇六・九月）をとりあげ、全国の同志諸君に対して、その学習を呼びかけるのは、この論文のもつ二つの意義によるのである。

ここにおいて、レーニンは、(1)初めて一九〇五年革命の最終段階において生まれてきたパルチザン戦争について、「大衆的労働運動の組織を党派性としてきた」ロシア社会民主党の組織的立場から、その位置付けを行い、同時に、(2)「新しい闘争形態」の位地付けをおして、闘争形態の一般的位地付けを試みているからである。

では、我々にとっての現代的意義は何であるのか。言うまでもなく、第一の点は、今日のゲリラ的権力闘争の位地付けとその組織問題と直接関連しているからである。

ある。

勿論、我々は、一九〇五年の革命とその直後（〇六・九）の時代と今日の日本階級闘争との歴史的社会的状況の相異を念頭におかなくてはならない。だが、レーニンが、マルクス主義の歴史の中で、いかにこの問題をとらえたのか、しかも社会革命党（エス・エル）のテロル戦術に対して、労働運動の反政府闘争としての組織を党派性としてきた社会民主党をいかに再武装したのかは、六〇年安保闘争以来、大衆的反政府闘争を以って階級闘争を切り拓き、その中から権力闘争を切り拓いてきた日本の我々にとって、具体的に摂取しなければならぬ原則点をなしている。

第二の「多種多様の闘争形態の位置付け」の問題は、我々にとっては特殊に意味が深い。

「権力闘争の多様な形態」—ゲリラ戦・実力闘争・街頭デモ等—を否定して、権力闘争を工場—職場闘争に一面化するだけではなく、その工場—職場闘争の組織についても、「サボから反乱」に至る闘争形態の形式的自己展開の図式を「頭で考え出し」、その教科書作りをもってソビエト運動の推進であると錯覚している岩田派や、その類型の中での手直しとしてしか考えようとしなない半岩田的中间派に対する分派闘争において、この闘争形態の一般的位地付けの問題は、その一中心をなしているからである。まさに、この点についてみれば、レーニンの指摘のように「マルクス主義は、大衆の実践について学ぶのであって、書齋に坐った体系屋が、頭で考え出した闘争形態を大衆に教えようなどという思いついた考えをもつものでは決してなす」のである。

二、

では、一九〇五年の革命とは何であり、パルチザン戦を含む革命の軍事問題に対し、レーニンはいかにこたえたのか。

そのためにはまずレーニンと共に、本文における「ロシア革命によって提起された闘争形態の歴史的發展」をみてみよう。

我々は、その中において、労働者人民の組織的闘争—この「組織的な」というのみは、ロシア社会民主党を中心とする意識的組織化を多かれ少かれ媒介としているということである—のロシアにおける始まりは、一八九六（一八九〇年代後半）であること、

一八九六年以降のその闘争は、「一九〇五年に至る十年間の中で、①経済的ストライキ（一八九六—一九〇〇）、②労働者学生政治デモ（〇一—〇二）、③農民一揆（〇二）、④種々なデモと結びついた大衆的政治ストライキ（〇二—〇三）へと発展し、この主体的発展の中から革命が生み出されたこと、をみるであろう。

一八九六年以前においては、「人民の意志」党の下に、ツァーリに対するテロリズムが闘かわれていた。一八九六年以降の大衆的労働運動の発展は、「インテリゲンチヤ陰謀家の仕事」という人民の意志運動の限界を突破しようとして、マルクス主義の立場に立った人々—その初期には、官許の合法マルクス主義、経済主義の潮流を含み、後の社会民主党の部分は、当初はその一部にすぎなかつた—によって推進された。だが、党非合法法の革命家組織というレーニンの党組織論は、それに先行する人民の意志党の組織原理の継承であった。またその中において、一九〇二年ロシア社会民主党が結成され、旧来の、農民

社会主義を掲げる「人民の意志党」も社会革命党として再編された。従って、こうしたロシア革命運動の歴史全体をふまえるならば、〇五年の革命は、一八七〇年代以降のロシア革命運動の成果である。

〇五年の革命は、こうしたロシア階級闘争の主体的展開の上に、〇四年以来の日露戦争の敗北によるツァーリ権力の政治的威信の動揺をさけ目として爆発した。

それは、①一月九日(血の日曜日)における請願デモパレード戦—工場ストライキ、②その地方への波及③五月の軍隊の部分反乱(戦艦ポチョムキン号の反乱)④全国的政治ストライキ(十月)、⑤大衆パレード闘争と武装蜂起(十二月、モスクワ)として発展した。バルチザン戦は、このモスクワの闘争と共に成長し、その敗北後においても、翌〇六年をとおして、ロシア各地において持続されたのである。

三、

こうした〇五年の革命の渦中における、レーニンの提起した軍事問題は、二つある——

一つは、軍隊の部分的反乱の評価、一つは「党内部に新たに軍事委員会を組織」し、「その下での武装隊の組織」、「広範な戦闘諸グループ、諸サークルの結合」、

軍の問題として戦略的に把え返したレーニンの卓見を見ると共に、しかし、それは、今日の日本階級闘争の軍事問題—自衛隊の反乱—革命の軍隊(例えば、中核派の如く)—に直ちに直結しうる問題として考えることはできなす。

四、

先にもふれたように、〇五年の革命に対するレーニンの軍事方針は、それまでの非合法党組織の内部に(具体的には、地区委員会の中に)「特別なグループ」として軍事委員会を組織し、あるいは「諸政党」、「諸グループ」、「諸サークル」等を結合し、それらを「初歩的な戦闘行動」の経験をとおして、「蜂起の中核部隊に成長させていく」ものとし、あるいは、ソビエトの制圧地帯においては、そうした武装隊を「パトロール隊として」「革命権力の萌芽」としての行動に移行せよ」というものであった。

だが、事実は、この問題の具体化については、著しい立ちおくれがあった。軍事委が組織され始めるのは、革命の中期以降であり、しかもその経験の欠如しているボルシェヴィキー社会民主党の作業は遅々とし、「ベテルスブルグ所屬の軍事委員会へ」、そこから爆弾闘争に

「エス・エルとの蜂起のための戦闘協定に基く革命軍の組織」であった。

〇五年五月、ポチョムキン号の反乱を評して、レーニンは「軍隊そのものの中から、革命軍の諸部隊が現われている」とし、「軍隊反乱」を、「革命軍をつくる試み」(レーニン・「革命軍と革命政府」一九〇五・五月)とし、「武装蜂起・革命軍・臨時革命政府」を、革命のスローガンとして掲げた。

〇五年の革命において、パレードの大衆と軍隊との交歓は、しばしばみられたことであったが、一月の血の日曜日事件以降、わずか四ヶ月後に、十二月の頂点のすでに数ヶ月前において、軍隊の内部から下級兵士の反乱がおこったということは、〇五年革命—ロシア革命—の特徴の一つである。

これは、一七年革命においては、広はんな兵士ソビエトの組織という形で、ソビエト権力の軍事的条件をなすに至るのである。このことは、ロシア帝国主義においては、その軍隊が、特殊な閉鎖集団として伝統的に固っているのは上層だけであって、戦争の度に膨大な大衆を下級兵士としてかり集めるので、その中に階級関係が直接にもちこまれやすいというロシアの特殊性に基いている。我々は、ポチョムキン号の反乱の直後に、それを革命

ついでにの経験と戦闘部隊とをもつ社会革命党との「戦闘協定」(蜂起のための戦闘協定)が、かなりの位地を占めることとなった。

このように、ボルシェヴィキー社会民主党が、軍事組織の問題に立ちおくれたのは、その党組織が非合法組織であったとはいえ、エス・エルのテロル闘争に対して、その必要性を原則的にはみとめつつも(レーニン)、労働者の中で党建設と大衆的労働運動の組織を党派性としてきたからであり、またそうしたものとして組織をつくり、伝統的に運動を展開してきた以上、軍事組織の形成の移行に時間がかかるのもやむをえぬことであった。従って、十二月のモスクワ蜂起も、革命の軍事部隊を中心とした計画的行動というよりも、大衆ストライキを基礎とした労働者武装反乱という性格にとどまったと考えられる。

五、

ところで「バルチザン戦争」において、レーニンの問題としているバルチザン戦争は、こうした〇五年革命の頂点をなした十二月のモスクワ蜂起の中で生まれ、その武装反乱の敗北以降も、翌一九〇六年をとおして、無党派労働者、諸戦闘グループ等によって、ロシア各地で「かなり広範囲に」展開されていたのであり、同じ時

期に、国会における政治活動を主軸としていたレーニンは、改めて、そのバルチザン戦争の位地付けと、それとの関連における軍事組織の位地付けと、それとの関連における軍事組織の位地付けをつきつけられるのである。

これに対し、レーニンは、このバルチザン戦争を、「蜂起と次の蜂起への中休みを媒介とする武装闘争」であるとし、こうした軍事行動が「党を解体させる」という苦情に対しては、「訓練」を対置している。

レーニンは、一方において、バルチザン戦と軍事問題を内乱という情勢においてのみ問われる問題とみなしている。だが他方において、にも拘らずこの中休みが一二年の程度を越す長期となった場合はどうするのか、という問題は提起していない。軍事問題を臨時的な、特別なものと考えていた、と思われる。

すなわち、一九〇六年以降のレーニン・ボルシェヴィキの活動は、国会を使った宣伝・煽動と、召還主義・解党主義との党内・党派闘争をとおして、プロレタリア党組織を維持するという活動が主となり、こうした軍事委一軍事組織は、党資金の収奪のために一二度発動されるだけで自然消滅していった、とみられる。

その結果、一九一三年の「ロシア革命の軍事綱領」においては、〇五年革命における「革命軍の組織化」とい

う中心がなくなり、民兵の組織化に一般化されているのである。

六、

世界史上初のプロレタリア革命としての一七年のロシア革命は、プロレタリアート内部におけるボルシェヴィキの党組織力とその政治的・ヘゲモニーによって達成された。

然し、一七年革命は、〇五年革命をはるかに上回る大規模な軍隊反乱・兵士ソビエトの形成によって、「ツァー打倒・帝国主義戦争の即時中止」に向けての巨大な軍事的基礎は与えられたものの、しかし、ボルシェヴィキの軍事組織を中核とする革命軍の組織化については、〇五年革命の程度すら位地付けも与えられず、その結果、革命の軍隊と革命戦争の問題に対する重大な立ちおくれと、それに基く一八年以降の革命権力の変質の原因をばらむのである。このことは、一七年革命の軍事力が、前線の兵士の反戦意識に基礎をおいたものであったこと（その反戦は、えん戦への歯止めを欠いたものであったこと）、兵士ソビエトが、革命軍の母体となりえなかったこと、と総括される。（従って、ソビエト権力の解体は、通常トロツキーにならって、戦時共産主義下におけるプ

的外れであると共に、誤りである。

七、

以上の中から、我々は、総括的に次の事を総括し、教化しうる。

(1) 非合法党組織の一部としての軍事組織という党と軍事組織のレーニンの位地付けは、日本の革命にとって普遍的なものである。

かつてのロシアと同様、日本においてもプロレタリア階級内部に党組織を作り出すことは、革命の不可欠の条件だからである。

従って、われわれは、工場・職場・学園内部に党細胞を組織すること、それを基礎とした党の一部として軍事委一軍事組織を組織していくことを原則的方針としなければならぬ。

(2) 問題は、次の点にある。「党一その一部としての軍事委」というレーニンの組織的位地付けでは、〇六年以降のロシアのように、軍事組織の解体一消滅を必然化するのではないか、という点であり、「党一細胞の否定」という赤報派の見解は、この種の見解の極端化したものである。

だが、それは、レーニンが、軍事組織を内乱の時期に

プロレタリアートの都市から農村への離脱によってそのメルクマールとされているが、然し、その根本は、兵士ソビエトが革命軍へと成長・再編成されえず、兵士ソビエトが解体したことに求められねばならない。）
これらは、言いかえれば、レーニンが、革命戦争への本質的位地付けにおいて明確ではなかったこと、具体的には、レーニンが、帝国主義戦争に対し、第二インターの「協力」、チンメルワルド派一メンシェヴィキの「平和」に対して、「内乱」の戦略を対置したにも拘らず、その内乱の位地付けが帝国主義戦争に対する革命戦争としてつきつめられえなかった、ということによっている。

以上のように一七年革命のはらむ問題は、〇五年革命の中で一度は形成され始めた軍事委一軍事組織が、消滅していったこと、または、〇五年革命における軍事問題の水準が、革命戦争の問題として深化されるのではなく、逆に大衆武装一民兵の問題にだけなって後退していったことと結びつけて総括されねばならない。

こうした中心問題を全くみることなく、「労働組合の反動性をとらえていなかったのがロシア革命とレーニンの限界」とする「権力二号」の岩田的諸見解は、とんだ

のみ必要なものと臨時的に位地付けていたことの結果
なのであり、一端蜂起に直面し軍事組織を組織したなら
ば、次の蜂起に向け、持続されねばならないものとして、
我々は位地付けねばならない。

(3) ロシア社会民主党は、その結成の当初より非合法
党であり、軍事問題は、政治組織としての非合法党内
部に軍事委を組織するという問題として問われた。

これに対し、日本の共産主義組織は、半公然の組織活
動を軸として形成し成長してきたのであり、従って、非
合法軍事組織の形成は、重大な困難を伴う。

だが、自らの組織に即して、その困難を打開すること
こそが、我々の義務である。

前衛岩田路線の様に、対権力闘争を切り替えることに
よってその回避を合理化することは革命の問題からの
回避以外の何物でもない。

(4) レーニンは、エス・エルに比較してのボルシェヴ
イキの経験の欠如、広範な戦闘グループの存在という事
実に対して、「戦闘協定」の問題を出したのであるが、
我々は、共産主義左翼組織の党派的分派の群立という日
本階級闘争の主体的特徴をふまえたとき、そうした問題
は、日本革命の根本問題の一つになると積極的に考えな
なくてはならぬ。

八、
闘争形態の一般的位地付けについては、その具体的検
討は、別にすることとして、我々は、次の言をも自らの
ものとしておく必要がある。

『共産主義者は、特殊な原則を立てて、プロレタリア
の運動をその型にはめようとすることはしない』(マル
クス・共産党宣言)

『レーニンは、マルクス主義のもっとも本質的なもの
と、マルクス主義の生きた魂は、具体的な状況に対する
具体的分析にある』と『毛沢東、中国革命
の戦略問題』

一九七二・一月

中国革命戦争の歴史的意義

毛沢東・「中国革命戦争の戦

略問題」及び「戦争と戦略の同

問題」について

この二つの著作の中、「中国革命戦争の戦略問題」(一
九三六・一一)は、井岡山を中心とする第一次国内革
命戦争の総括であり、「戦争と戦略の問題」(一九三八
・一一)は、長征(一九三四―三五)を経て、抗日遊撃
戦を開始するに際してのものである。

われわれは、この二つの文書から①中国共産党の形成
の歴史を自らのものとし、②中国革命の戦略的意義、③
中国革命の共産主義運動における普遍的意義の追求を課
題とせねばならぬ。

第一に、井岡山を中心とする国内革命戦争の時期(一

九二八―三四)は、中国革命と中国共産党にとって決
して平坦な革命戦争の成長の時期であったのではない。

農村を根拠地とする革命戦争の戦略路線化、紅軍の遊
撃戦術の基本的血肉化等は、八年間に及ぶ党内闘争の
プロセスをとおして、滲み込んだる苦心と血の犠牲の上に
樹立されたものである。

一九二八―三五の八年間において、毛沢東が、根拠地
の党内指導権を保持していたのは最初の二年弱(一九二
八―三〇)であり、それ以外は、「左」翼日和見主義の
指導部(李立三路線(一九三〇・六―九)及び王朝・博
古指導部(一九三一・一―一九三五・一))の下に苦難
を極めていた。

従って、長征途上における一九三五・一月遵義会議の
奪権にいたる過程は、中国共産党における激烈な党内闘
争の過程であった、ことを知るのである。

毛沢東は、四年間以上にもわたる長期にして執拗な
党内闘争を経て、中国共産党を革命戦争の指導部に再生
し成長させたのである。

中国共産党の党内闘争の直接的対象は、モスクワ帰り
のコミンテルン派(王明・博古指導部)であった。従っ
て、スターリン・コミンテルン路線との直接・間接の闘

争こそが、党内闘争（二八）三五の主要な内容であった。

こうした過程を経て、中国革命の戦略問題として本質的地位付けを与えられる革命戦争の問題は、マルクス・レーニン主義の闘争の歴史の中において、中国共産党が初めて革命の本質問題として提起した問題である。

マルクスは、たしかに四八年革命の直後において、フランス大革命に対する反革命戦争に対し、フランスかかった国民革命軍による革命戦争の教訓から、資本主義の拠点イギリスに対するヨーロッパ革命からの革命戦争を展望するが、しかし、五〇年代以後のマルクスは、専らブルジョアジーの戦争—ブルジョアジーの民族解放戦争・侵略戦争—に対するヨーロッパプロレタリアートの立場を問題としていたのであって、プロレタリアートの革命戦争そのものを真向から問題としうる歴史的条件は到来していなかった。（ただし、パリ四八年革命・パリコミニューンにおいては、自然発生的にその様相を示す）

また、レーニンも、根本的には、革命戦争の問題を「その可能性をマルクス主義者は、否定する事は出来ない」（「戦争と革命」一九一七・五月）という次元においていること、すなわち、具体的な問題として積極的な地位付けと考察の対象においているのではなく、「否定して

はならない一般的可能性」の次元においていたのである。（また、そうした階級闘争の歴史的發展段階の中にレーニンはおかれていたのである。）

中国共産党と毛沢東が、マルクス・レーニン主義の戦略問題の分野において、新たな寄与をなしたのは、まさにこの革命戦争の戦略的地位付けである。これは、中国革命の勝利展望を切り拓いただけでなく、ベトナム—ラテンアメリカ—中近東等々の今日の革命闘争の拡大と持続の歴史的第一步を切り拓いた。

我々は、「レーニンとロシア革命の軍事問題」の中で、①レーニンは、プロレタリアートの革命戦争の意義を必ずしも明確にさせていたわけではない。②それが、〇五年革命で一端組織した軍事委員会の解体につながったこと、十七年革命は、軍隊反乱という形で、革命の軍事的基礎が与えられ、その結果、革命は、ソビエト内部におけるボルシェヴィキの政治的ヘゲモニーの樹立にかかわることとなり、このロシア革命の圧倒的栄光の中から生まれたコミンテルンは、革命の軍事的側面—革命戦争の問題を積極化しえず、ややもすれば、それは、革命にとって外的な必要なものとして消極化されがちであったことを総括した。

革命戦争を開始して以来、なお四年余りもその戦線と

戦術の定着化のために、党内闘争とそこでの苦渋にみちた敗北の試練を経なければならなかった。ということ、それが、単にスターリン、コミンテルン派の誤った戦術に対する闘争であった、というだけではない。革命戦争を積極的地位付けえないコミンテルンの粹—マルクス・レーニン主義の教条化—そのものとの闘争という根本的性格をもっていったからである。

四

この戦略問題における革命戦争路線を、マルクス・レーニン主義の理論上の発展の問題に移せば、そこでの意義は「国家権力の主要な構成要素は軍隊である」として、マルクス・レーニン主義の国家理論をより一步その核心に關って具体化したことである。このことは、プロレタリア革命における人民の軍隊のもつ意義を核心的に表現し理論化している。

レーニンは、一七年革命の真只中にかいた「国家と革命」において、国家とは「武装した人間の特殊な部隊」—「暴力組織」—以外の何物でもないことを示した。

これに対し、毛沢東は、権力の支柱は軍隊であることを明確に指摘しただけではなく、レーニンが、政治権力を掌握したプロレタリアートの作り出すべき組織として軍隊を把えがちであるのに対し、その建設が国家権力打

倒の中心的前提問題であることを鮮明にさせたのである。

五

中国共産党は、マルクス・レーニン主義の戦略問題において、以上の様にそれを発展させただけではない。その原則—共産主義—の分野においてもさらにその具体化と深化をおしすすめた。

それは、共産主義を、人間の自己変革を推進力とする主体的活動の直接的目標—地上の問題—としたことである。人民公社運動—文革は、まさに、それに他ならない。だが、我々はそうした共産主義が、井崗山—延安の革命根拠地の中に、紅軍の中に生まれてきたこと、今日にいたる中国共産主義とは、紅軍とその根拠地の中に生まれた共産主義の拡大である事を知らねばならぬ。

従って、中国紅軍の規律—「三大項目・八注意」は、共産主義の精神—自己規律のエッセンスである。

これまで、共産主義とは、革命によって直ちに問題とされるものではなく、革命後の物質的生産力の巨大な発展を経済的基礎として、初めて可能である、とされてきた。こうした共産主義についての認識は、スターリン時代において教条化—徹底化した。今日のソ連社会は、こうした生産力の増進が自己目的化され、労働は依然としてその手段のままであり、その増進のためにブルジョ

ア的手段が依然として用いられている。

だが、これまでのマルクス・レーニン主義においては、物質的生産力の発展を基礎として、共産主義をとらえるという認識と、共産主義を労働―生産者自身の自己変革―集団変革に基く主体的目標及び主体的運動として把える認識が、どちらが主で、どちらが従なのか、明確にさええぬままであった、といつてよく、基本的には、物質的生産力の発展が主要な基礎であるとされてきた。

中国共産党は、それを第二義的であるととし、共産主義への主要な要素は、人間の主体的活動であるとした。これは、従来、唯物論の形式的教条化を党派性としてきたマルクス・レーニン主義の教条化に対するコペルニクスの転回である。

中国革命と中国共産党の歴史的意義の基本点は、以上の点に集約される。

ところで、毛沢東―中国共産党―中国革命の問題は、マルクスやレーニンとロシア革命のように、我々にとつて、いわゆる歴史的総括の問題として存在しているのではない。毛沢東は生きており、中国革命は現実の運動であり、中国共産党は、今日の世界革命闘争と日本階級闘争とに対し、主・客両面から巨大な規定力として作用し

ている。

日本階級闘争の主体的経験を基礎として、それに相対するとき、我々は、何よりもまずその中から本質的成果を見究め自からのものとしていくという姿勢をとらねばならない。(中国共産党の今日の対外政策への原則的批判は、こうした姿勢を媒介としてのみ原則的批判たりうるであろう。)

日本の共産主義左翼戦線は、十七年の歴史の中で、中国革命の評価をたえず外的なものとして扱う傾向にあったからである。その中で、六七年以降の階級闘争がようやく権力闘争の課題を現実のものとし「根拠地・人民の軍隊・革命戦争」の問題を、日本階級闘争の主体的問題として提起しているからである。

(一九七二・二月)

「革命権力」 第二号

発行 黎明社

(〇三) 七七三―〇七九八

品川郵便局私書箱四九号

発行日 一九七二年五月二七日

頒 価 三〇〇円

党建設の第二步の前進をめざして

前衛・労働者革命委員会

全国の同志諸君！

我々が、今年八月、それに先行する一年半有余の前衛派内の論争↓フラクション闘争と組織的再出発に向けての独自の準備活動の集約点として、前衛・労働者革命委員会を結成し、その下に、いかにささやかではあれ組織活動を開始して以来、八ヶ月間が過ぎた。

左翼戦線全体の視点からいえば、この七一年―七二年春の時期は、九・一六三里塚闘争における機動隊センメツ戦の展開―一〇～十一月沖繩闘争における共産主義左翼戦線の分断と混迷、連合赤軍の闘争とその行動をめぐる時期として特徴づけられるが、しかし、再出発した我がの組織活動にとっても、その第一の段階が終わり、我々が、次の第二の段階に入らなければならないことを示して置く。

ではこの八ヶ月間―結成以降の第一段階―における我が活動の意義は、どこにあり、またその総括から、第二段階の党建設の中心を何に設定しなければならぬのか。

我々にとっては、この問題は、二つの側面において存在している。第一は、全体としての党建設の問題である。これは基本方針―戦略・戦術・組織方針の総括・修正・発展の問題である。第二は、我々の組織実体を具体的出发点として、いかに我々の路線を実現する組織を創り出し、いかに階級闘争を闘うのか、という問題である。

現在我々が、第一段階から第二段階への問題を言う場合、この二つの側面において、それぞれ第二歩への移行が問われているのである。

では、この間の我々の「全体としての党建設」の意義は何であったのか、と云えば、

それは、第一に、岩田路線の根本的止揚を基礎としたことであり、

第二に、それを、この間の共産主義左翼戦線の直面した問題の深化―日本革命の戦略問題（工場占拠・人民の軍隊・革命戦争）―に関わって行ったこと、

第三に、前衛・労働者革命委員会として前衛派からの関係を明確にして再出発したこと、であった。

第一の点は、前衛派―岩田路線（理論）―のもとに闘ってきた者が、新たな党的組織化―岸田路線との全面対決―を行なうに際しての、特殊に重要な問題である。部分的批判の範囲によっては、岩田路線の手直し―岩田理論への埋没と屈服しか結果し得ない。

従ってこの点こそは、旧マル戦派系―前衛の者が、日本の革命運動の主体的推進力となるためにはさけて通ることの出来ない一点であり、その点を全く素通りしたままにしている（怒濤派）や、その点にまで突き進むことを回避し、あるいは突き進みえずにいることによって問題を前衛―若田路線の枠内に止どめさせている前衛内の部分に対し、我々は、その点の全面切開と止揚をもつて、再出発―再建の準備としたのである。

三、

党―組織を基軸とした全体としての党建設の問題を明確にするために、特に、組織問題についての我々の基準を再確認しておけば、次の諸点である。

①党建設の中心問題は、自らを日本の主体的階級戦線のいかなる具体的地位におくのかという党の具体的な組織的地位の問題である。（「革命権力」一号）

②そのことは、新左翼の根本的地位付けの問題であり、我々は、六〇年安保闘争以降の歴史的総括の上に立って新左翼を、日本のプロレタリア権力の基本主体として地位付ける。（同）

③党の組織原則の根底をなす規律の根本精神は、共産主義者の自己規律でなければならぬ。（同）

④党の組織方針は、党―行動委―大衆組織であり、それによって、権力闘争とソビエト運動の二者択一を止揚するものでなければならぬ。（同）

⑤「組織的継承性の問題」―党の指導部は、党組織全体に対して責任を負っていると同時に、それによって組織外の労働者学生生活動家大衆にも責任を負っている。従って、その綱領的諸内容についての継承と、自らのものとしての内的総括と止揚が公然と問われる。だが岩田路線というのは、前衛四〇号論文において、「前衛は、

ブンド（マル戦派―六―七回大会）とは、組織も理論も関係なく出来た」として、組織の継承性と歴史的総括を完全に切り捨て、日本階級闘争における一指導部としての基礎的条件そのものを解体させたのである。我々だからこのような「前衛」結成時の曖昧さをも克服して日本階級闘争の革命的展開を担う組織へと自己をきたえるであろう。（同）

四、

我々が、ここにおいて、「組織問題を基軸とした全体としての党建設」を更に一歩進めるために明確にさせねばならないのは、この組織的継承性の問題についてである。それは、「共産主義左翼戦線の根本的地位付け」、「それに対する我々の地位」の問題を、我々自身にそくて徹底的にはっきりさせることである。

我々はそのことを「綱領的諸内容―具体的には、岩田路線と、ブンド六回大会テーゼについての自らのものとしての内的総括」の問題として、即ち主として、内容上の継承と止揚の問題としてこれまで把え明確にしてきたのであり、また我々の再出発・再建の基準は、それを基軸とするものであった。

だが、我々は、それをふまえた前衛・労働者革命委員

会の結成と、この間の組織活動の中から、内容上の継承性は、さらに組織上の継承性の明確化によって伴われなければならないということを総括し、それを第二段階の全体としての党建設の主要任務とさせなければならぬ。我々にとっての組織上の継承性の明確化とは、ブンド（旧マル戦―六―七回大会）の継承性の明確化のことである。

また、その問題こそが、前衛派結成時より前衛派―我々に問われていた組織問題上の中心問題であったのであり、従ってまた、その点を単純に切り捨てるのか、どうか、という問題こそが前衛派内の論争・分派闘争の組織問題上の根本問題であった。それゆえに、我々が、綱領的内容上の継承性の問題から、組織的次元において継承性の問題を明確にさせるということが、実は、岩田―岩田派―岩田路線（理論）に対する、組織上の我々の決着なのであり、そしてそこまで我々が問題をつきつめるということが、「工場占拠・人民の軍隊・革命戦争」の戦略問題と、そのための「ソビエト運動と権力闘争の二者択一の止揚」の路線によって、日本階級闘争の直面している困難の打開に向けて活動する我々自身の主体的前提条件を作り出すという党建設の第二步の前進になるのである。

論争の戦略的総括

— ブンド七回大会・赤軍・京浜「遊撃戦の戦略問題」について —

(この文書は、昨年(七一)一〇月のものであるが、「連合赤軍の闘争と行動をめぐる諸問題」とあわせて、同志諸君に積極的深化を訴える。)

前衛・労働者革命委員会

我々が、ブンド七回大会(六八・三)―赤軍派(六九・六)―京浜(七一・一)という形で、論争の戦略的総括を行なおうとするのは、その止揚の道こそ共産主義左翼戦線の混迷の止揚につらなること、と考えるからである。

六八年以降の共産主義左翼戦線の論争の焦点は、対権力闘争か、権力構築のための闘争―ソビエト運動か―というその二者択一をめぐる点に存在していた。

「蜂起が先か、ソビエトが先か」、「党独自の闘争か、大衆運動―階級形成の運動―か」、「軍かソビエトか」あるいは「非合法闘争か、半合法・合法闘争か」、「非合法党か、半合法党か」等の論争の諸問題は、その点から発生したものである。そして、現在もお全問題の中心は、その点に関わって存在している。日本の共産主義

左翼戦線に問われている問題は、その二者択一の枠そのものを打破すること、それを日本革命の戦略問題に關つて明らかにすることによって、六七年以降の階級闘争の教訓を全面的なものとし、革命に向けての再武装を達成すること、である。

一、ブンド七回大会(六八年三月)をめぐる論争

六〇年の敗北と階級闘争の解体を再編―再建し、革命的左翼と実力闘争の主体的戦線を構築する過程(六三年―日韓闘争)と、ブンド第六回大会(六六・九)をめぐる党派論争の諸問題は、①日帝の動向の把握、②戦後世界体制の分析、③統一戦線と階級形成という形で危機論を中心とするもの(危機と革命への展望、その下での闘

争)であり、ブンド(マル戦)はその推進力であった。六八年以降の論争の水準が、それをのりこえて、権力闘争とソビエトをめぐる問題へと移行したのは、論争の自己展開の結果としてではない。日本一世界階級闘争の現実的質的転換によってであった。それは、

①六七年一〇・八を境として、日本階級闘争は、初めて武装の問題を主力闘争の中心に据え始め、それによってそれに先行する六〇年代中期の日韓闘争における主力闘争の限界を突破する新たな歴史的歩みを開始し、

②その主力闘争の発展の中から、六八年五月日大・東大を突破口とする全共闘運動、学園占拠、学園ソビエトが生み出され、学生というプロレタリア人民内部の特殊分野においてではあれ、大衆的権力組織の萌芽が登場し、

③六八年一〇・二一新宿闘争から、日本階級闘争はこうした学園を根拠地とする(対)権力闘争へと成長することによって『武装組織による対権力闘争』と『ソビエト型組織としての全共闘』という形で、あらゆる革命の根本問題としての権力をめぐる問題が、初めて公然と提起されたからである。

そうした事態の本質的性格は、「全共闘運動」それを根拠地とする権力闘争」という権力闘争の本格的構造が、

論(然し、それはそれまでの段階においては巨大な歴史的意義を果したのである。その歴史性は正当に継承・評価しなければならず、岩田派→ドトウ派の如く、その清算と切りすては党建設に結びつかない)と、新たな行動→先進国における武装闘争との矛盾という点に存在していたのである。

我々が現在、この七回大会をめぐるブンド内部の論争の性格を総括してみると、二度の羽田を頂点とする主力闘争の先頭に立ったマル戦派が、その主力闘争の意義を革命の権力問題に発展させていくのではなく、逆に、関西派の対権力闘争の抽象的強調に対し、階級形成の対置を一面の党派性とする形になっていった、ということである。(註)

従って、七回大会を頂点とするブンドの党内一党派闘争の底には、対権力闘争か、階級形成の運動か、という形での、それ以降の論争の枠をなした根本的な問題設定が横たわっていたのである。

(註)「前衛」結成以降の、とくに六九年秋期闘争以降の岩田路線→ソビエト運動(行動委運動)の教条的絶対化傾向は、六回大会の枠内におけるソビエト論のもちこみによる再編成であり、六回大会路線の権力闘争論を媒介にした戦略的止揚たりえていない。

形成される以前の時期(六七羽田→六八前半)において、主体の内部において自覚されていたわけではなく、むしろさまざまな論争→従来からの論争の底に横たわっていたのである。

六七年以降の日本階級闘争の巨大な展開につき動かされた論争の第一の巨大な頂点をなしたのは、共産主義者同盟第七回大会(六八・三)である。

七回大会をめぐる論争の特徴は、旧来からの危機論を中心とする左翼戦線の全論争→連続革命か、世界同時か、日帝単純自立か、日米安保体制か、等にダブって、その下に隠されながら新たな質の論争が登場してきたことである。だが、その中心問題→我々は、そうした二度の羽田闘争をけん引したブンドマル戦派の指導理論(ブンド六回大会テーゼ)が、こうした新たな権力闘争の開始に生き生きとこたえるものを欠いていた点を中心に爆発したものである。我々→マル戦派にとっては、行動と理論のギャップを革命的に止揚する問題が、それまでの闘争の水準をのりこえる問題として、六八年初頭に、ブンド七回大会を前にして問われたのである。

こうして共産主義左翼戦線の新たな党派→党内闘争の第一の頂点をなしたブンド七回大会の問題は、古い理論→「危機→革命論」、あるいは、旧コミンテルン型革命

二、赤軍派(六九・六月)

六九年六→七月における赤軍派の登場と、その分裂をめぐって、共産主義左翼戦線内部の党派闘争は、はじめ、権力闘争の武装をめぐる意識的論争として展開された。

だが、同時に他面では、その新たな力程は、「蜂起かソビエトか」という赤軍派登場の問題提起に象徴的に示されているとより二者択一的提起の限界の枠を伴っていたのであり、その結果、プロレタリア人民大衆の内部における階級形成→ソビエト運動の切りすて、それらを党活動の一部に有機的に位地付けえず、大衆の自然発生性に委す、という傾向を残していたのである。

ところで、赤軍派の登場は、直接的には、四・二八の敗北をのりこえて、いかにして六九年秋の佐藤訪米阻止闘争→安保決戦を闘うのか、という点に關っていた。だが、六九年秋においては、東大→四・二八の敗北をのりこえる対権力闘争の打開は、共産主義左翼戦線の内部からは切り拓きえず、問題は依然として未解決のまま七〇年に残されたということをいみした。

問題を、日本階級闘争自身の主体的かつ具体的問題と

して赤軍派が提起したにもかかわらず、ソビエト的運動・プロレタリア人民大衆内部の階級形成のための活動・半公然—公然活動を位地付けえないというその二者択一的提起の限界だけでなく、その対権力闘争の提起の中にも克服すべき限界があることをいみしたのである。(5) わゆる前段階(蜂起)

「階級間戦争・革命の軍事組織・その武装の質」という問題は、しかし、従来の対権力闘争の戦線の単純な否定の上にはなく、実力闘争—全共闘運動—都市反乱闘争」という対権力闘争の巨大な発展にふまえ、そしてその直面した困難を突破するものとして、すなわち、対権力闘争の戦線におけるその前衛的闘争とその組織の問題として、問われているのである。

三、関西派(七〇・一二月)

①「戦争派か、ソビエト派か」、「ソビエト派解体」という関西派のスローガンに示されるように、依然として対権力闘争か権力構築のソビエト運動か、という二者択一的設定の枠にあること。②その活動スタイルを客観的にみると、赤軍派のように、公然活動の解消、切りすてによって非公然活動に一本化するというのはなく、

公然・非公然の両者の設定となつてゐること。③権力闘争の二側面についての戦略的位地付けのツメを欠いてゐることによって、公然・半公然活動の意義が「革マル—日共解体」という党派闘争としてしか設定されてゐないこと、である。

だが関西派は、「対権力闘争か、権力構築の運動か」というブンド七回大会以降の彼等の二者択一的設定様式からの根本的転換を問われるであろう。日本階級闘争の主体的成果をふまえて、権力闘争—革命戦争の問題を具体化していこうとするならば、それは、必然的である。

四、京浜安保共闘の

「遊撃戦の戦略問題」(七〇・一二月)

京浜安保共闘は、赤軍派の決戦論的傾向を、ゲリラ戦として克服しようとする問題を提起した。

既に明確なように、六七—六九年階級闘争の核心問題は、学園を根拠地とする形であつたにせよ、権力との対決—階級戦争の段階に入った点にこそ、その意義が存在し、従つてその直面した問題は、国家権力の新たな攻勢の前に都市反乱型権力闘争が敗北した点に存在した以上、六九年以降の問題は、権力闘争の敗北を権力闘争の新たな水準の形成によって克服し、同時にそれを最前線とす

ることによって、対権力闘争の全戦線を再編成していくという点に関わつてゐる。

従つて、京浜の提起は、その打開をめぐる闘いの一環である。

では、彼等の「遊撃戦の戦略問題」は、権力闘争とソビエト運動とをどのように位地付けてゐるのか。

「労働運動は、その発展成長過程で、必然的に労働組合をのりこえ、大衆的な新しい闘争機関が生まれだすことは、ソビエトの歴史をみるまでもなく必然である」

「山ネコスト、職場占拠、等々の実力闘争に労働運動をおしとどめるのではなく、街頭政治闘争の最も進んだ形態である武装闘争に依拠してこれとの結合を求め、自然発生的労働運動を権力闘争の水路に導くのが、共産主義者の任務である」

たしかにここにおいては、武装闘争とソビエトとの連関についての問題意識が存在してゐる。

だが、ゲリラ組織と人民の軍隊、人民の軍隊とその根拠地、が、明確に設定されてゐるのかといえば、それらの問題は、遊撃戦の持久的拡大の中に埋没してゐる。中国のように当初から根拠地をもてるわけではない以上、先進国—日本の革命においては、その根拠地自身闘いとられねばならぬ、ということになるのである。

①このことは、言いかえれば、遊撃戦の軍事組織は、戦略的には、工場・学園占拠を基礎とする人民の軍隊に成長するその先進的萌芽として、本質的位地付けが与えられねばならないということである。

②また、たしかにプロレタリア運動においては、自然成長的要素もその一部の条件としては存在してゐる。だが、それをソビエト形成の方向に転化させるのは、プロレタリア階級内部における前衛的意識的活動なのであつて、それは、権力闘争の組織の問題とは、相対的独自に党活動の中に位地付けられねばならぬ。

③このことは、日本革命の戦略問題につきつめると、ゲリラ戦の量的拡大だけで直線的に設定することはできず、遊撃組織が根拠地を基礎として人民の軍隊として確立される質的転換を媒介とするものである、とされねばならない、ということである。

五、補足

合同関西派の「烽火」、「赤報」(RG)、神奈川左派への再分解は、その組織的任務を、非合法軍事闘争に集中するのか、非合法と半合法の結合とするのか、という点をめぐるものであつた。

単一党を目指す、という「烽火」―関西派―の指向にも拘らず、分裂の再生産としてしか結果しえなかつたのは、彼らのいう非合法闘争と半合法闘争の結合というのが、ソビエト運動を切り捨てた上での対権力闘争の諸側面の結合にとどまり、そのことによつて逆に、非合法軍事組織が、ソビエトを根拠地とした人民の軍隊への萌芽である、という本質的位地付けを与えられないでいること、と無関係ではない。

ブンド関西派の再分解は、しかし、今日の共産主義左翼戦線の分裂状況の端的な表現である。

だが、この事態を必然的―宿命的であると考へ、党派的ツブシ合いを革命運動にとつて、本質的であると錯覚するに至るとしたら（岩田の新左翼主要打撃論も、その一つの現れである）、それほど皮相なものはない。我々は、逆に、その分裂の中に、それをひきおこした根本問題を見つけ出し、同時に、そのことによつて、それを止揚することの根本的意義―日本革命にとっての戦略的意義をこそ、明らかにしなければならぬのである。

我々は、まさにそのいみにおいて、「工場占拠・人民の軍隊・革命戦争」を鮮明に掲げると共に、我々の党建設をそれらの方向におしすすめるであらう。

一九七一年一〇月

